KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

一噸餘六千圓噸 目

ル 3
3279
5

木曾路名所圖會巻之四

目録

上諏方神社 拜殿 御供所 勅使殿 五層塔 六角井 三十九社 末社 文庫 大福殿 御手洗 大弥勒堂 神宮寺 繪馬舍 御柱 神宮寺 神社圖 大黒天 金堂 宮寺圖

○下諏方神社 春宮 末社 神楽殿 釋迦堂 秋宮 護摩堂

高嶋城

衣ヶ嵜

天龍川水源

御射山

諏方温泉

○上和田

大門嶺

○長窪

○蘆田

○望月

石割坂

海野平

姨捨山

城光院

望月御牧

角摩川

八幡宮 征塚

筑摩川

八幡

石馬圖

駒形社

○塩灘

門 ル3 3279 巻 5

昭和十六年一月十日寄贈 尼野[illegible]

○岩村田
○追分
諏方祠
寵石
熊野権現
横川開隘
○松井田
天神宮
繪馬舎
綱の宮
瓶
巖窟
御湯釜
雑貌
財天
疱瘡の神
橋
琵琶窪
貫前神社
住吉祠
北陸道別路
蓼科神社
○軽井澤
信濃上野堺
百合若足跟石
八幡宮
太神宮
兼摩堂
観音堂
中
身
門
稲荷
藥師堂
石階
原一村
八幡宮
○安中
神石
馬舎
大黒天
石階
回廊
歡喜天
御香水
若宮八幡
○板鼻
烏川
かぐら原
○小田井
浅間嶽
浅間山記
○沓掛
碓日嶺
日本武尊故事
上杉武田戰場
新田氏
足利氏合戰
刎石坂
○坂本
妙義山
末社
彼石
若社
○塩沢
国山坂
○高崎
佐野舟橋
定家卿宮
佐野長者跡
○会加野
蠶養を營む
居城未詳攻
○新町
金鑽社
上野武蔵境
岡部忠澄跡
○熊谷
普濟寺
蓮生法師墳
什寶
熊谷寺
○本庄
○深谷
岡部原
観音堂
熊谷亟實古城
綱古跡
○久下
吹上
○鳴巣
○桶川
氷川神社
本社
末社
馬場
一鳥居
女郎社
神楽殿
大宮原
焼米坂
調神社
笈吉稲荷
王子社
神明社
箕田八幡宮
○上尾
山王社
金鑽の社
神池
○大宮
氷川王子社
不動堂
針替村
○浦和
○蕨
○板橋
戸田川
平塚祠
富士権現
湯殿天神社
根津社
花島山
田畑八幡

妻恋稲荷

聖堂

神田社　牛頭天王　末社八柱

日本橋

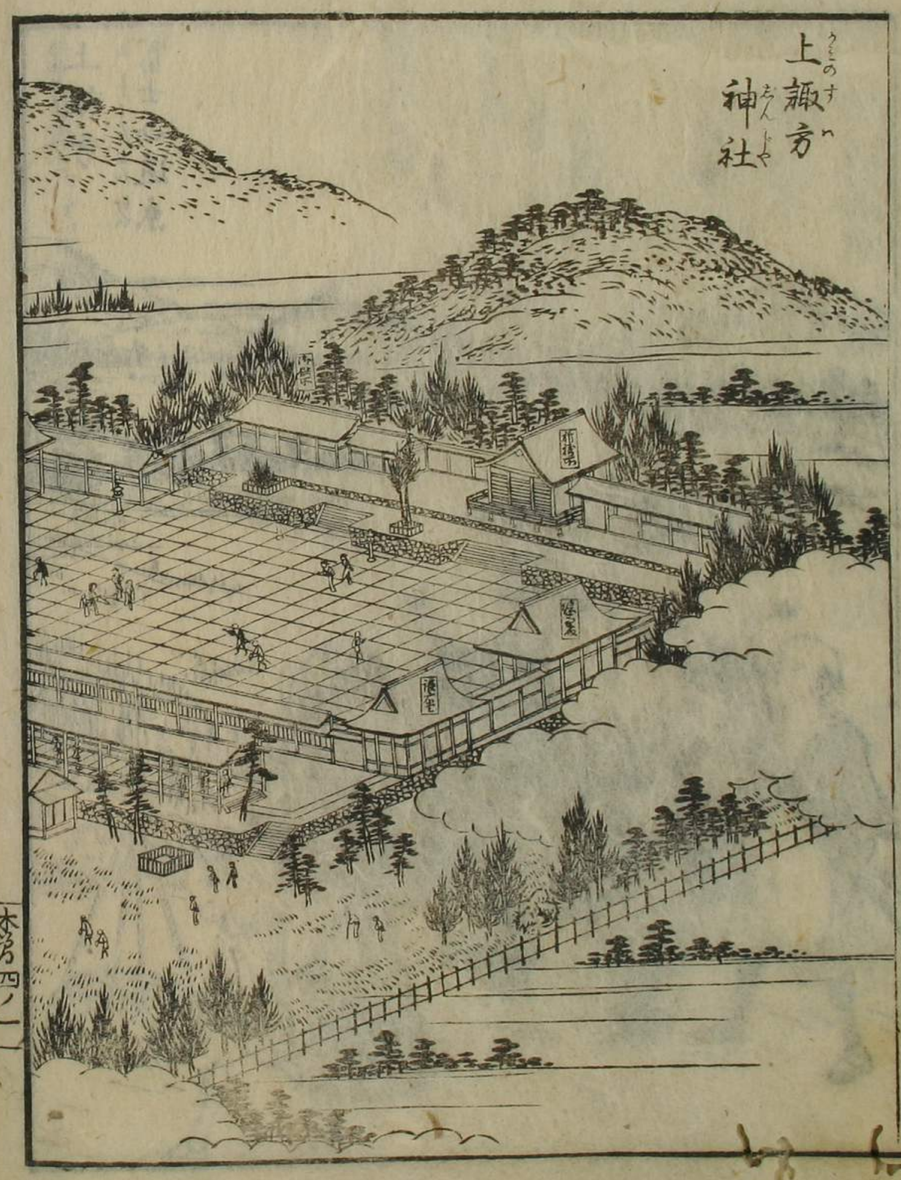
健吉社

人丸社

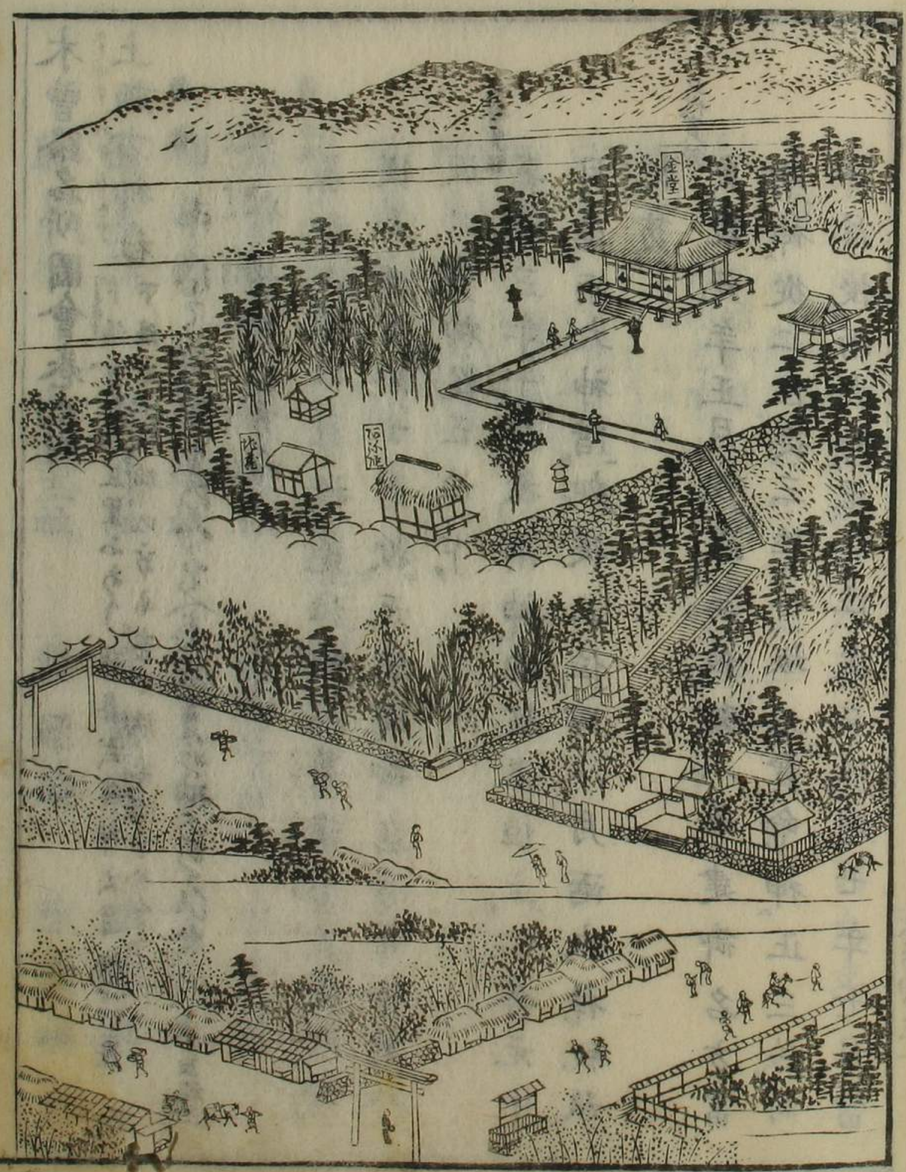
本曽路名所圖會巻之四目録終

上総方
富士山遠景

代明



本殿四ノ一


金堂
滝殿
石清水

上賀茂
神宮
寺
八宝塔
大講堂
三門
本殿四八二

上諏方神社 下諏方より二里ばかり延喜式名神大月次二座 下諏方より全神の方ハ南ハ湖 諏方の湖をめぐる

新集 あらたまる須波の祭乃みかを人ぞ有なわ神のちかひを 宗良親王

祭神 健御名方命

續日本紀 養和九年四月授二无位勲八等南方刀美命神一
従五位下一同十月授二无位健御名方富命前八
坂刀賣神従五位下一

文德實錄 嘉祥三年十月授二兩神一並従五位上一仁壽元十
月進二兩大神階一加二従三位一同八月兩大神祝預
把笏

三代實錄 貞觀元年正月授二正三位勲八等建御名方富
命神一従二位従三位八坂刀賣命神一正三位同
二月授二兩大神一正二位従二位同七年七月當

郡水田三段為二南方刀美神社田一同九年三月
進二兩神階一加二従一位正二位一云云

拜殿 南向美濃の庵のめぐり彩色内陣神の杜し和州三輪のやうし

御供所 殿の東

文庫 殿の北

祈禱所 殿の西の郷よ

繪馬殿 殿の南

護摩堂 繪馬殿の西

三十九間廊下 本二十九所の末社あり

前宮社　砥並社　若御子社　所政大明神
楠井社　大歳社　荒玉社　柏手社
溝上社　瀬大社　玉尾社　千野河社
藤島社　内御玉社　鶏冠社　穂謨社
酢藏社

習焼社　御座石　御飯殻　相牟社
若宮社　大西御庵　山御庵　御佐久田
闕庵　八剱社　小坂鎮守　鷺宮明神
荻宮明神　連屋明神　酒室明神　下馬明神
御室明神　御賀摩明神　砥盃山神　義会會美酒
以上一棟廊下之側ニ鎮座ス

神殿中部屋　長廊社

大福殿　廊下の入口ニ有り
御拵　鳥居の内ニ有り
大黒天社　牟社の外ニ有り其外末社二所
勅使殿　社内東方ニ有り
六角井　日東の方ニ有り
神楽殿　六角井ニ連る
御手洗井　勅使殿の傍ニ有り

金堂　神宮寺の山より奉請す
牟尼　釈迦　普賢　文殊を安ス
五重塔　金堂の傍ニ有り　五智如来を安ス
種堂　塔の傍ニ有り　弥勒　永仁二年ニ建る
釋迦堂　石階の下ニ有り
大師堂　釈迦堂の西ニ有り　弘法大師を安ス
神宮寺　真言宗　興福田院と称ス　八百坊ニ属ス
尚社は科野の國一の宮ニ而特ニ上諏方を神須賀くして
社美麗なり例祭は年中七十五度ニ有り其中ニ毎年三月四日之
三ツ有り中を用ひ二ツは初を用ひ麻の頭と七十五組ニ而七神ニ
小供と又別ニ麻の肉弧料理ニ而社人も其麻の肉を食ス他人
麻肉等不獣を咎んと手ニ成る附属神ニ形して社人より著を立て喰ひ
猟師ハ毎年ニ一度申年御拵ニて大祭ニ
ハ遠近四方より諸人多く集りて其祭式殿前ニ安ス古来

より申伝へし七不思議なりと所謂御渡八榮給御作因
法潟　根入松　御射山　湯口清濁等なり沛渡とは信濃の日辛
丑く寒地なるして寒氣深く諏方の湖乃上に氷ちりて
氷なりて廿三日若為れば廿四日の頃上の氷方より下れ氷方ん
方に横幅五尺ばかりなる本石なるべく氷の上に有と付く
是ゆる二社例年必あり奇怪の事なれども沛渡とは又神先とも
ひふは沛渡のやうく渡人なる沛渡なれ門を渡ぶ此為さゆえ年に
よりて沛渡のなる上の諏方より下なる事はなりしと下の氷方の方に
沛渡ある所なるべく其所ふりて年の豊凶なるとは沛渡第
一文字に沛と或をゆむ事なり

信濃下諏方

和田峠山路五里八町　諏方の駅一千軒許もあり者人多し旅合
小出女あり　馬牧あり　かあんぐもさんぐ宮沛して寒熱し

諏方春宮　北の坂の下にあり　神楽殿　田廊　佛殿
毎歳正月初日に沛渡　神楽殿　若宮　伊勢両宮　籠所　竈殿

祭神上諏方と同神　祭殿
子安社　護摩堂
何れも本社のめぐりにあり毎年七月初日に沛渡神樂
諏方秋宮　駅中にあり　若宮
去宮より　社の宮空社なり　社の宮より　空社なり

舊事紀　天孫降臨時。大己貴神第二之子。健御名方命。
欲拒天孫於是經津主神遣岐神逐之健御名
刀命。逃到信濃國諏訪郡迫甚而請曰。願得此
郡以為父母之讓不為天神之怨而作吾居則
吾豈奉背天孫哉。因茲經津主神以諏訪一郡
附于健御名刀命是即諏方明神也

神皇正統記　大物主神子。健御名刀美神者事代主之弟也。
今諏方明神是也。一云神功皇后征三韓時。天
照大神託以住吉明神。諏方明神令為輔佐

諏方湖

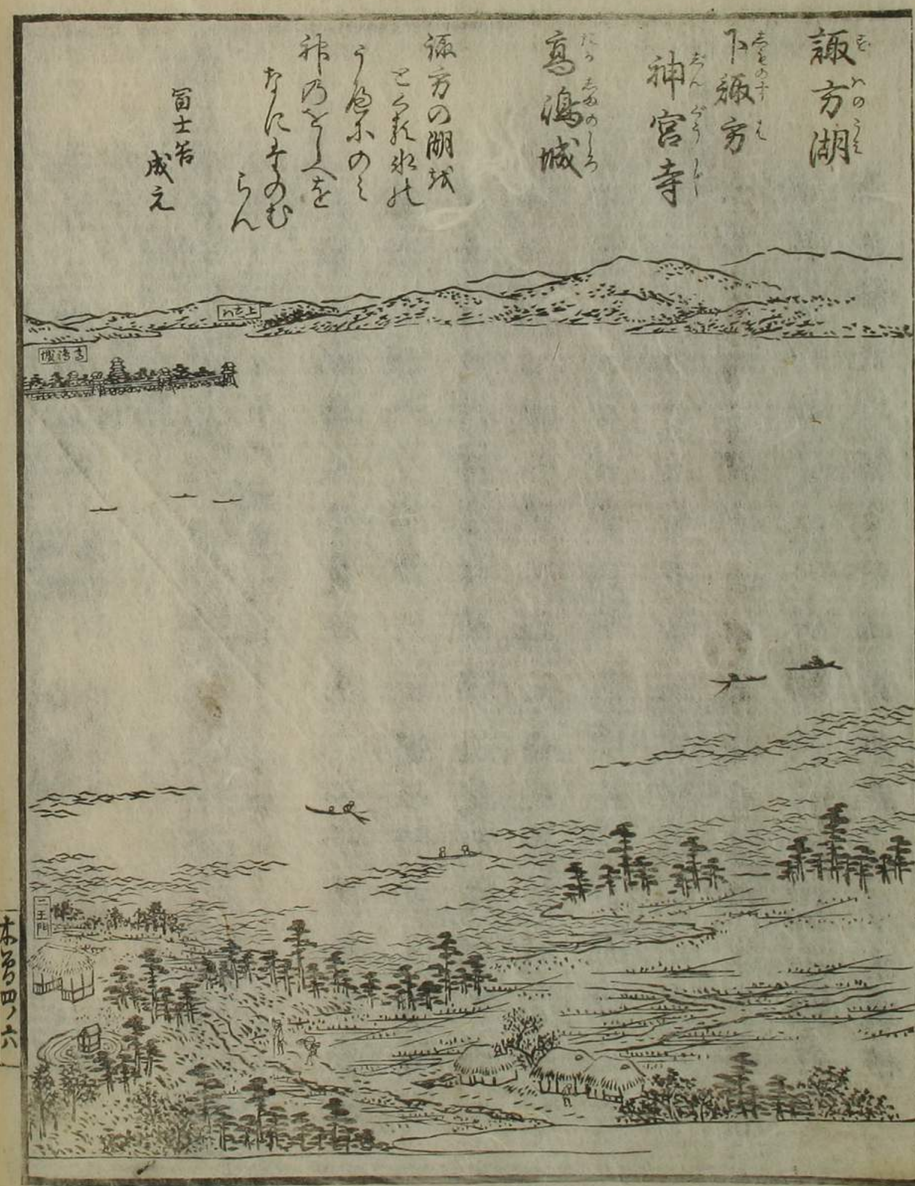
下諏方

神宮寺

高嶋城

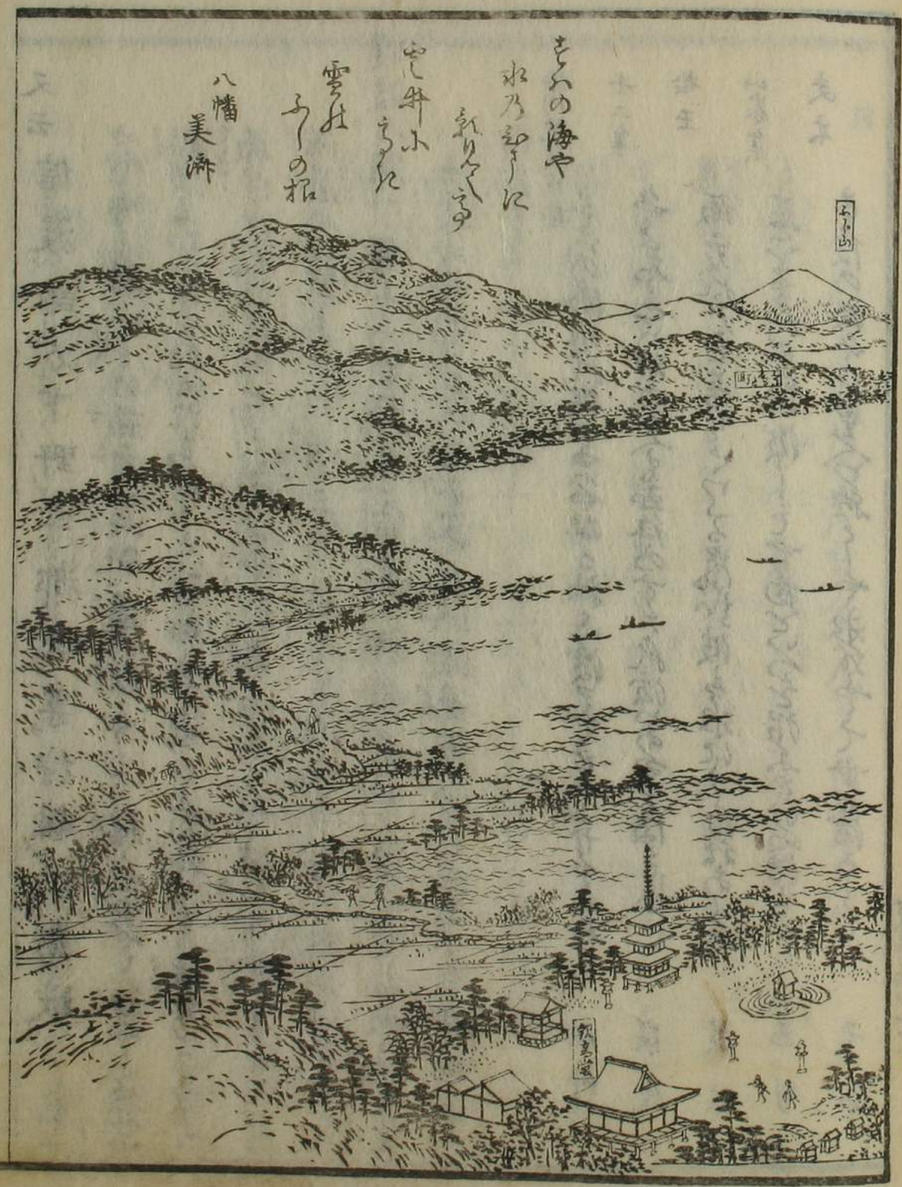
諏方の湖は
こゝ見れば
うゑふのゝ
神のとゝを
なに十のむ
らん

富士谷
成元



きゝの海や
水乃ゆくへに
ゆりてゝ
やし舟ふ
ちに
雲は
ふりの松

八幡
美濤



又云 信濃、諏方。下野、宇都宮。専狩猟供鳥獣

名あり。扨下の諏方八此街道の駅なり。て諸舎多く紅葉流水
樹々まるうれ女たちはぐくみ せ神ひさ祓ひさろく
猿引れ人乃見とぐむ所の中に温泉あり。て山肩の女あるくして
浴屋の口狭く流れ浴する其所より幾つの高く多く狭牛乳舎く
須波乃湖 周十一里餘 直三里許 鯉鮒 亀甲あり 今ハ水治りて
いまゝよ及ざるその絃玄その氏湖面風ひらひてよう水鏡たん

ぶ〜〜

堀川院後百首 孝仲
壬二集 家隆
拾玉 慈鎮
山家集 西行
文本

山湖まきゝ分て尾をつる弱の尾ちつむ流 親隆
民家衆〜四方ゆ山ふ浦くあるく
て恵鮮城をれぐる年 年〜漁舟乃外 氷小乗くく棒ぶこの
湖色のぐ〜ろ年 年〜漁舟乃外 氷小乗くく棒ぶこの
物さぐろ年れ寒編ふよりて 氷乃のうちあるひを佛老れ初ろう
氷ろて流人を上を通表を年にるて 冬月の末二月先年
中で氷のうを山を氷の厚さ年 八九寸一尺 紙寸あり其
上氷の行乃大木大石を年くも流る事 幾千人ひてうてを老
うぶ氷のうをぶ橋をよりく通る甚しく雪積を年 常九
ぬくぶんををくぶうんぶ 叶履ゆてを切馬をぶる 放流ぶ
日本国中に湖多 ぬくの氷を所あるく 信濃
日本ゆく地高くして 寒氣浦れ氷なる 湖氷なるて流人

本書目八

武田勝頼ハ
我勇威を
自負して
神併とる数
せ代る遠へ
勢さ沙ひ一時
勿ち板橋崩れ
名を半ず
古統滅亡の神乃
出るかと
怪しむる

氷の中に網を引を氷引といふ一種又奇異の業なり氷に穴を所々長く
うがちて其所より網を入れ其先に竿を持て氷の穿ち
たる所より次のうがちたる所まで竿を送り廻して幾所もかくの
ごとくにうがちて網をしまひて魚をとる事なりおほく
とる事を知らずして童漁人をあざむくとせば又氷をうがち
漁を得て膝に長き竿を持て若落入ても竿にすがりて
死をまぬがるゝといへり或は沈没の人あまた番に鶏を入て氷の上を
ひかしむ鶏なく所にして屍を得るといへり

高嶋城 下の諏訪より壱里ほどあり諏訪因幡守居城なり三方は石垣
縄手五町ばかり有左右は湖水にて陸の方一所より入口あり其前は川より舟の
出入自由なり此城は山本勘助晴幸縄張をしたりとぞ
高嶋の森は城の下をいふ
冨士山の影うつる所なり

衣裳濟

夫木　須波のうみみぎはがみえてはるかなる日には富士の山の浪のまに
すはの海衣が濟にきて見れば冨士のうつらぬ浪のまくらに　大納言師氏

諏訪温泉 此所奇一説に若桜宮天皇の御製とも又弘法大師ともいふ何れも不詳
されども人に益あればいづくにもあらん
入湯すれば下諏訪駅中に三所あり旅人及び駅中の人ともに平生
浴するなり本陣の傍よりの湯は中を隔てゝ高貴あるひは男女
を別つ川端に末の雑人は上に浴ふ
おなじく衣の洗ひ物にも此流にて洗ふ

冨士山眺望 下諏訪の湖辺あるひは上諏訪の湖辺
よりも鮮に見ゆる所程北又里許あり
雪の冨士はうみに相対す

天竜川水源 諏訪の湖の落口天竜川なりこれより東海道天竜川
に流るゝ其流れは日路あり上の諏訪のむかひの山を風越
といふ其西の山を守屋が嶽といふ湖に良にあたりて
八がたけといふこれ小田井の方より見ゆる八嶽の山なり何れも
高山なりまたの湖のめぐり小川にうぐひといふ魚多くして
其のほか此ふなと数多の漁人あり寒の頃より夏の
頃の附にのぼり来りて綾をとる漁人網をうつ
此地の人ども是を赤魚といふ下れば彼岸桜の頃より糸桜多
し遠く国中は湖の辺を帯にして所々に彼岸過ぎに
彼岸桜を一本八重其外桃梨の類も一度に花ひらき
げに絵の境なり

雑喬

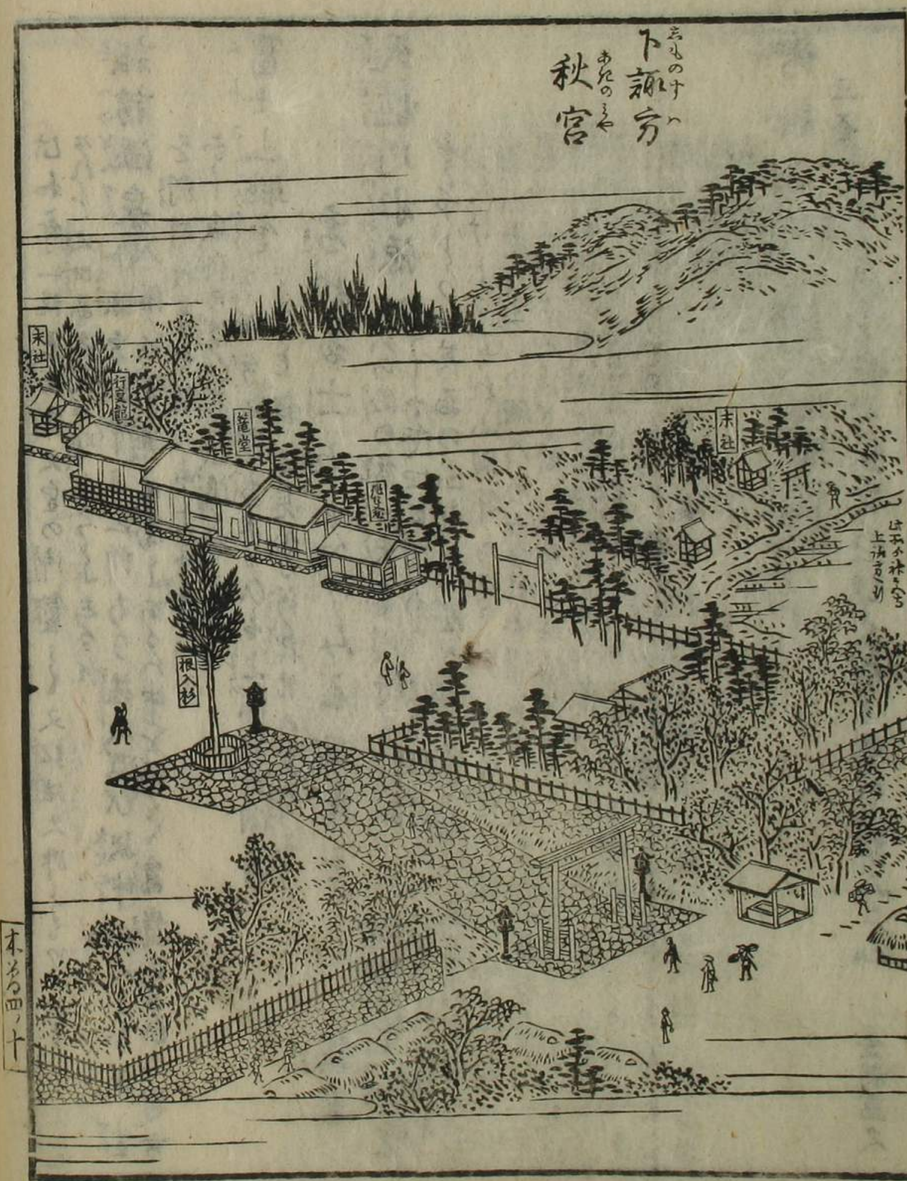
御射山

玉葉

むかしより御射山のみまつり射る矢の満ちたる
ひがしの山をとりてゆく
射るは矢の播磨なり
とふかく穂にいでぬる一むかしいふ甲斐なる諏訪のみさ山

金剌盛久

類題
宮柱
道遥院
本社
本社
本社
本社


下諏方
秋宮
本社
本社
本社
根入杉

毎年文月廿八日神射山狩ふいでゝ同廿九日幸の社ふ
ゝを祭る長官丸領家名の四ツ屋社ゝ
ゝゝ神代穂屋乃神事
保屋社ゝ記 諏訪郡射山神戸の赤八ケ嶽の麓を被屋敷
ゝ所を 又筑摩郡松本の郡 高水の神
保屋社云

神社考抄 ゝ法なる海社ゝ記も風俗ゝ伝ゝ
題目云海やのゝ前ゝ記れの國ゝ有其所ゝ記 今小縣郡塩田
保屋の地名也

文永二年九月十三夜野鹿を

後古今 御宇ゝ海屋の寸記の社風ふそゝ鹿も書ゝ 関白左大臣

素面抄 四ツ屋社海やの社ゝ記ゝ 読人不知

纂集名鷹形ふゝ諏方の神社ゝ賛嘉に備ふゝ

東鑑 建暦二年八月記云可禁断鷹狩但於諏方
大明神御贄鷹者被免之云云

信太社百首 信太の社百首

宗良親王

風祝部

袋草子 信太の社の榎候ゝ風の社ゝ記ゝ

深後頼

信太の國を きゝ風早記ゝ諏方明神の社ゝ風乃
祝ゝ記ゝ神を春社始ゝ物ゝ祭ゝ祝ゝ
百日の間尊重ゝ信ゝ物ゝ祭ゝ風祭ゝ農業ゝ
ゝ祭ゝ祝ゝ物ゝ祭ゝ記ゝ日光ゝ見ゝ
信ゝ風納ゝ我後頼の歌此歌ゝ

勝頼諏方泰翁應歌藝

去程ゝ法性院大僧正信玄去元亀天正元癸酉四月十二日迄去ゝ
三年の間ゝ深く此事ゝ院窓ゝ今年天正三年四月十二日七佛
事を執行ゝ国方の歌國ゝ此度ゝ信ゝ心ゝ感
離ゝ今ゝ者ゝ別ゝ織田濱松の豪家合祢ゝ勝頼

春宮
千百
本社

本社
本社
本社
春宮
温泉

と攻滅さる企巌密なるべし武田の旧臣勝頼を孫め常に其備の怠なく
城を責てうるおゝふ武田の幕下三列山家三方の内佐久の城
主奥平美作守貞能其子九八郎信昌去丙八月より遠州濱松所
隨所して用意長篠城小橋籠る勝頼は事故ありて急ぎ
出馬あり〳〵長篠城を攻て新城〳〵やく天正三年五月中旬甲斐
の鉄を出馬せんとおぼしめしよりて是武田道遥軒信連穴山左衛門尉
入道梅雪二條右衛門尉信綱を始て数人其勢一万余騎人を囲へ
直国深右衛門尉信綱を始て数人其勢一万余騎人を囲へ
はゝ諏方大明神小手指あり之を進発せ給へ〳〵
かの社小馬城向へ種る所小名居の茅屋白紙小附伝云よりお偽
ふ亀甲の持陣梅檀壹の下より折ること不測なれ其ゝ高遠
へ是を引る附板橋武馬ゆく信濃〳〵あるふつゝみを堅固ふみ〳〵
橋ふふ中程より遠ふ落て舎人をけゝめふ人衆三人を死せ

沛馬鹿ふ特ふ勝頼馬上の達者ふて所〳〵を走て駆廻と
ちてよりう沛身ふ悪も受ることわうふよりく今度の合戦いうであんせ
雑人ども私語ふるを理く〳〵きい武田三代記ふあり

和田大貨

下の諏方城主高合橋あり山両谷ふも諏方ふく志ふ和田
義盛の嫡孫あり世橋村三場あり是ふ世所ふ西保屋所ふ移ふ
又世一所を移て和田作ふあるこ紙嶋の峯ふも空快なる附ふ富士山強
見高ふ函坂治し東坂屋ふ〳〵三月の末まで雪ふのうて寒〳〵地形基ご
ふる紀所ふ貨ふう紀ふ東保屋村ふ〳〵所ふ三場の茅屋あうこれふ
上和田〳〵三里六所ふ山中ふ名茅ふ〳〵所得九橋茅下毛見虎尾州
約陸茅ふ世湯見なぶふ〳〵紀茅見見西記

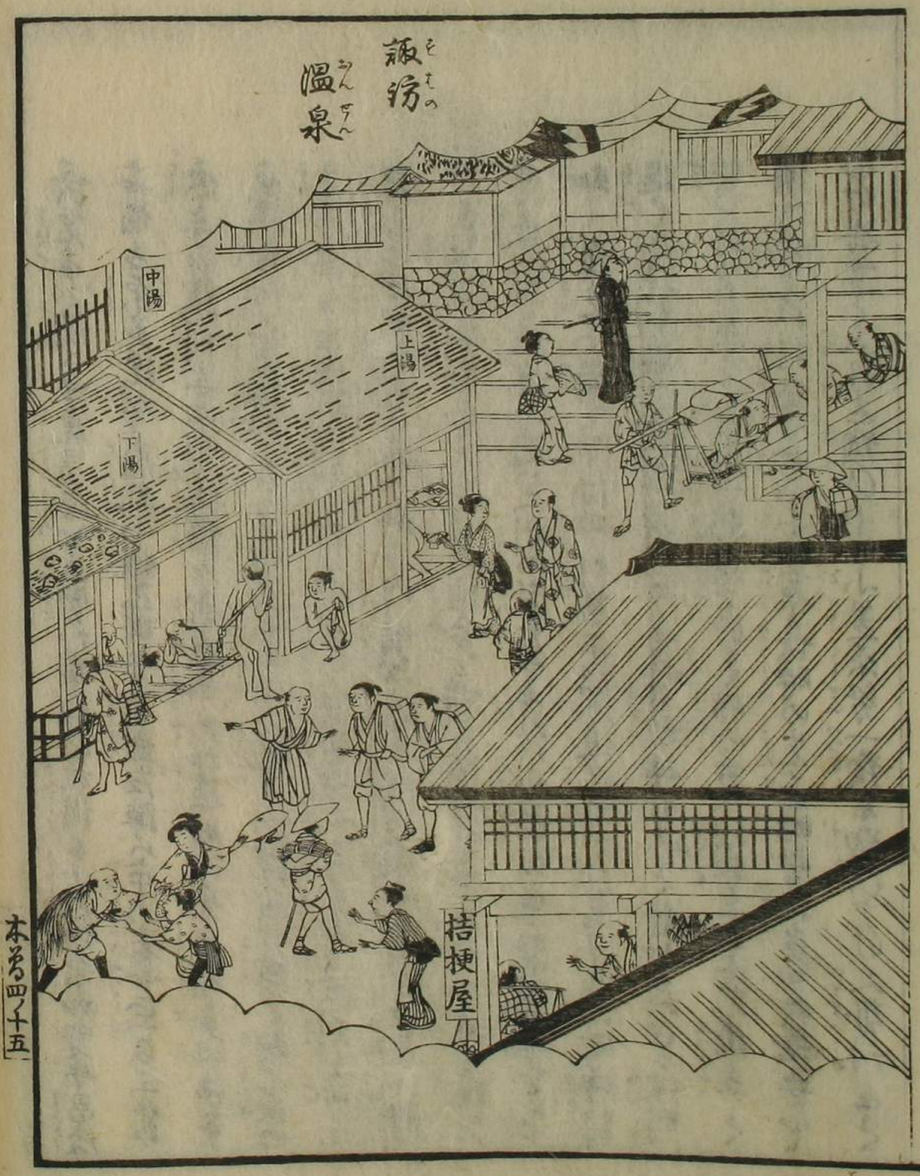
上和田信濃

秀ふ〳〵婦馬をちふ〳〵や和田作　世　骨

長久保ふて武里ふ駅の宿〳〵八情の屋〳〵酒あり和田義盛の
霊紙ふるふ〳〵宿の出口ふ川橋あり和田ゞふをすぐく

長窪の南ふ大門峠大門村より海道より遠ふ西る下和田ふ至場
ひして栗屋より深山口村青原ふれまで小縣郡より依田川ふ大橋小
橋十間許あり南北渓ふ和田より流東ふ大門道より流る
大門峠 又大門村の南ふあり 武田伝云也 伝列 伝法
大門峠合戦云 小笠原長時村上義清両家の軍勢一萬二千餘人大門峠へ押寄る
小笠原村上両旗ふ向ひ戦中に其時時信小笠山内脇に控へ
武田家の軍勢も峠へ物見を仰付られ義二人打出さ敵ひ
十郎義政人を遣わし物見を仰付られ義二人打出さ敵ひ
敵ふ峠へ向ひ小笠原村上両旗ふ向ひ拵ふり其勢一万騎と相
見へ然も後ふ備へ三義ふまで軍をさつく驚ろ作戦中に成り時信宮
左右ふ備を深ふして八ヶ嶽の禁甲列通梶ヶ原に陣を捕ふ
法勢の内足軽隊将援田備中守内子息義茂十郎甘利ヶ原加へ一乃
先ふ備まで二の身弧甘利ろろ内三田清治嫡子新兵衛ふ従ふ父子
板垣ふ加へ二の備の先ふ内歩間三義ふ尉を伯耆兵部加へ

三の先ふ小備さ也虎昌後を堅む本陣の新備を士大将原加賀守昌後
右備ふ原美濃守虎胤小幡山城守虎盛左陣ハ市川来女正一ふ二ハ郎
原与左衛門与内郎後備ふ武者奉行加藤駿河守昌頼多田治郎
左衛門市川入道梅印ろり拵る慶ふ信及勢大門峠ふ打越ふ村上家の
先ふ布下平治入道知十軒其外宗徒の者共行ふも奇正の列を正し
懸合の次を相計ふ知十軒ハ備ふ進先横田備中守ふ手先ふ押
切る両陣関を合ふ砲弓れ迫合を始め後の穂先を揃へふ互ふ場を
出る手ひろ平治入道ハ大剛の者なられば自給ふ退ふて士卒を下
知ふ真先ふ突て切ふ甲列勢平治入道ふ働ふけちこれ一所ふ引
退ふ二番を安ふ思ひて二の手れ甘利押切ふ勝ふ信列
勢を固ふ三ふ絶ふ知十軒ふ作の方へ引ふを武三郎追ふ
備ふ乱ふ引退ふ次ふ小笠原長時の先ふ略聖山ふ田清治守也
かけ合ふ入乱ふ戦ひ小笠原勢一戦ふ戦ひ大勢討ふ


諏訪の温泉
中湯
上湯
下湯
桔梗屋

信州一方の先鋒両度共ふうち負しかば大将義清大に怒りて我旗本
をもかく傷敗を一戦に改せんせ競ひかかく押来る安間が勢信玄
両方より小幡紙入をもくと必死と戦ふる信州勢いと多勢なれば大将義清
一戦に敗を突崩さんと競ひかかく進せ来る安間が勢戦ひまけく
四度迄は崩れく中所詳引退く二の曲輪へ飯富兵部士卒広
勇て村上勢に突かれ大将小笠原右馬助長時采牌を取て兵部
が勢に能合せ退く巴の字に戦ふる其時旗本の前に備る原加賀守
昌俊横陣に突かんせ妻手の方へ備を押寄れば大将晴信自ら
采牌を取く旗本と共に左の方へ押寄原加賀守が備と左右
より敵中にして横陣に突崩ふ敵紙
突崩ふ中にて信州勢晴信昌俊両備の横陣に敗走してこれを
崩れく散乱を先手の二備を引て追撃を限りに印を揚げ其首を
取ふに帳面一千七百廿一級なり味方合戦為に者疵を蒙むる者

雑兵合せて三百余人なり寄手場所迄三人なり寄手場所迄
蘆田まで一里半 此駅の民居三百所ばかりなる 軍記あり
ちなみ其辺めぐり小散在
長窪（信濃）
石荒坂 此所より吾妻まで十五里
上の後方へ七里 此間坂道なり
石割坂 此坂より遠よ妙義山見る
蘆田（信濃）
至月まで一里八町 芦田何某が城跡あり 此駅に眼茶を売
海老平合戦
海老平に信玄と謙信と 此所にて合戦なり 又根津村に根津
甚三郎が居る所あり
海老平合戦
十月十五日海老平にて戦ふ 則かの地に押出さる時信山に
晴幸小幡虎盛原虎亂 此三人を召れ果 晴幸若大将なれども 項羽
共も敗く勇将なれば義清に頼まれく今日の合戦を必定 十死一
生なれども三人仕軍之海者三人物見に行く能見極まるべ
中宮より三人則張向に敗の横陣を下 雲し張向て山中助助が中

なるハ故の備速なる中ハ濁りとゝやゝものゆへ合戦を持く持ハ始く
尚京よりの取合形まハ甚備の俗法歳字ゝとゞやゝる原小憐がやゝるハ
敵成程合戦を持く備蔓く相見さひ人数を六千の内ゝとゞやゝる
斬く三人又誰先も名きれ御見せ進へ申ハ時信海者三人の
外まこ伊の三位の者さんとそ上奉と迫付られ備の高綱ある時者味方
備の三位を悪く演舌して京虎いく小勇将ゆをせよ味方ハ一万五千
時誘今日手別まで兎角して時刻を移ゝ進ハ山方の吉刻小ゝ敵
若死別誘の大将ゆ味方勝ゝさ落ぜんして級せぐれ郷を移さば
敵ゝ流矢ゆ弱ゝ味方ハ引来の傷利と移進ゆやせば海ゝ江ゝ
中まゝ内ゝあゝハ備を三尾ゝ陣を構翼ゆ定らゝ内ゝ先ゝ
右の方ハ小山田備中守信別先方の相木市蔵尉重月甚八芳田
下野与友北平尾岩尾耳取後路平原左ゝ郡内の小山田左衛尉
信長先方ゆ長窪左馬ゝ尉小若甚八佐尾五郎左馬ゝ和田福住間

村山の中北先手に柔原左馬尉昌清信長と方々に須田清兵衛
賀綿内平上たり旗本の前備に真田弾正忠幸隆丸子庶民
旗本と一手なり旗本の右は方々四所許陣く仮屋兵部少輔虎尚
左隊を小備こう旗本は後備に馬場民部少輔虎政内藤修理正昌豊
日向大和守昌時勝沼入道宗山伊豆守信良武田典厩信繁此六頭
城を出く本陣の後こう弓手の方へ居り本備こう原加賀守昌俊
九十騎と殿く引下り出く跡備まで立てこう越後勢に龍の丸備あり
て弟虎昌身旗本城をつく時信の旗本に打合せんと欲せ殿に
強りとの下も仮屋虎昌馬上歩武者凡く一千五百人弟虎の弟術
城柔して旗本の右小備を立堅先例の赤備あり馬武具旗指物
渡く見てなれば立を猛勇の弟虎寄よ相違の事なり敵千九百
の手刻小山田備中守越後勢の先陣長尾正弟景虎と互小寄合く
鉄炮を打遠る行去れとあまく小筏を提々寄く入こと紙先登中

攻戦く越後勢戦ひ中く二所許迫り引ひ小田原城守様清和泉
守安田上総介甲州の左手小山田左衛尉と戦ひ小山田既に戦
負く武所許引退く是を見て柔原左衛尉信長と戦ひ
合て急の左鼓を打せて甘糟近江守備ふ弟虎の旗
本より揚貝城吹立させ大将弟虎自身宇佐神護河内良勝城連て
只武蔵先手に独り柔牌を立く手強く勢を引あぐ所武田方ふ
戦事小山田勘助大将の法師ふ敵を恵綿よ備く守二の一戦と
相見へ推しも味方の陣法堅固ふして級んとす小虚るに西弟
虎戦ひを固つて引取やうく中ろ士卒長追仕ざるやうに
御下知法ふ推せ中ろ時信即百人の指物十騎ばかり小山田
柔原が備ふ獨させられる追撃を緩く敵と追ひ推せの人の小数科
ふ打ち居ふ元条制法ふ円場ふく追撃を絶るべしと若き弟
ら長ける小ふ引く結勢は暴ば駆く中して軍城羽先ろ今日午刻

より来の半までの合戦に敵兵討事弐百六拾三人味方の討死百卅壱人其日の申許に及んで首牒を勝岡に揚る　委くは山本勘介謀軍記にあり往て見るべし

更級　姨捨山

蘆田より七里あり郡の名にも更級郡にあり此地に姨石を以てあり傍に姨嶽山ともいふ

大和物語云　しなのゝ國さらしなといふ所に男住けり　わかき時に親は死ければ姨なん親のごとくにわかくよりあひそひてあるに此妻の心いと心うき事おほくて此姑の老かゞまりてゐたるをつねにゝくみつゝ男にも此姨の御心のさがなくあしきことをいひきかせければむかしのごとくにもあらずおろかなる事おほく此をばのためになりゆきけり此をば年老て二重にてゐたり

顕昭袖中抄云　此頃母の母とにひてしたしくて姨を妻の云に随て甥の母とも月あかゝりける夜おひて登りて更級山に捨たりけるより姨捨山とぞいふ

後頼無名抄云　むかし人めひを子にして年頃やしなひけるが母の姨しく老くちければむつかしがりけるにや八月十五夜の月のいみじかりけるに此母をすかしのせて遠く峰にのぼりて山の頂にすゑてよもすがら月を見て縁けるを其後此山を姨捨山といふ

古今　我心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て　読人しらず

拾遺　月かげはあかずみるとも更級の山の麓に長居すな君　紀貫之

後拾　これやこの月見る度に思ひやる姨捨山の麓なりける　橘為仲

新勅　さらしなや姨捨山の高嶺よりあらしをわけて出る月影　家隆

新後拾　子規なぐさめかねて姨捨の山に月まつ夜半になくなり　宜秋門院丹後

續千　月みれば衣手寒し更級や姨捨山の嶺の秋風　鎌倉右大臣

新勅　今更にさらしな川の流ても うき影見せむ物ならなくに　読人しらず

續古　さらしなやよそにて見る月の里人もなくさめかぬる夜はの月影　順徳院

後拾　さらしなの山の嵐も声すみて木曽の麻衣月にうつなり　同

姨捨　かくこむとかねて志りせは姨捨の山より出し月を見かた　源重光

後拾遺　まてともや姨捨山の月を見むよもたしおもふあるらを　赤染衛門

羽衣　（風流まではるゝ山の月を詠する旅人のうたに）思ひても形くてや我身姥みす姨捨山の月見るを母は　律師祐誉

千載　何ごとも月いわしぞいつまでかりうんさて志るのふ　隆源法師

新古今　行ゝ志るや姨捨山の有明の清たをもりの坂に流るか　伊勢

類題　てる月を見て衣ゐてそ更級や岩寺る寺を姨房まで　後柏原院

六帖　姨捨の月影をめでゝみをとの河あねそ春の雪みて散へき　濃人志らん

捨りけや姨ひとりなく月乃友　まさ紙

名の月や田毎乃玉か風清し　雛斎

眼をとぢて見るは涼しや夏の月　蕪骨

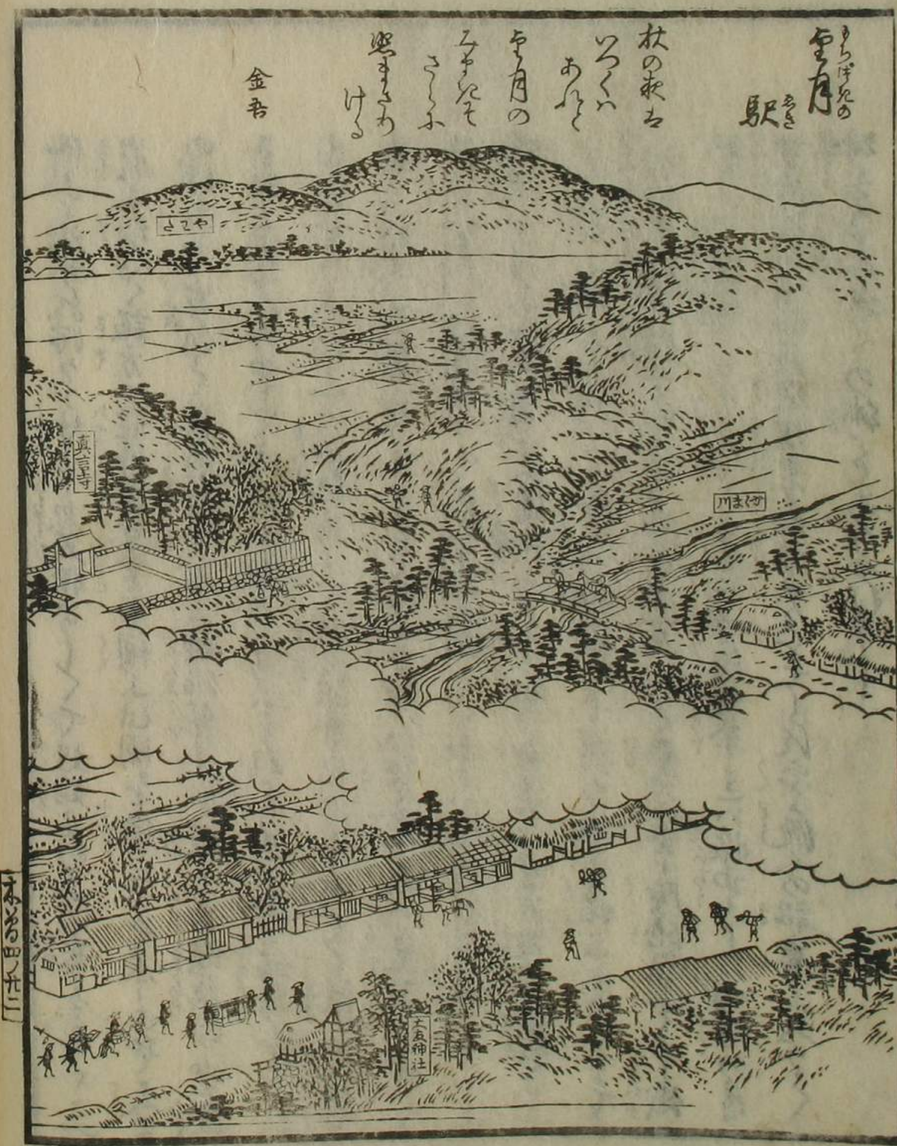
さて更級姨捨山の麓田の郷より七町ばかりにあり其所に武水別神社あり式内大名神今八幡村にあり社領弐百石又冠嶽の麓にある巌石あり是を姨石といふ高三丈余横十間余此所にまた庵ありて満月

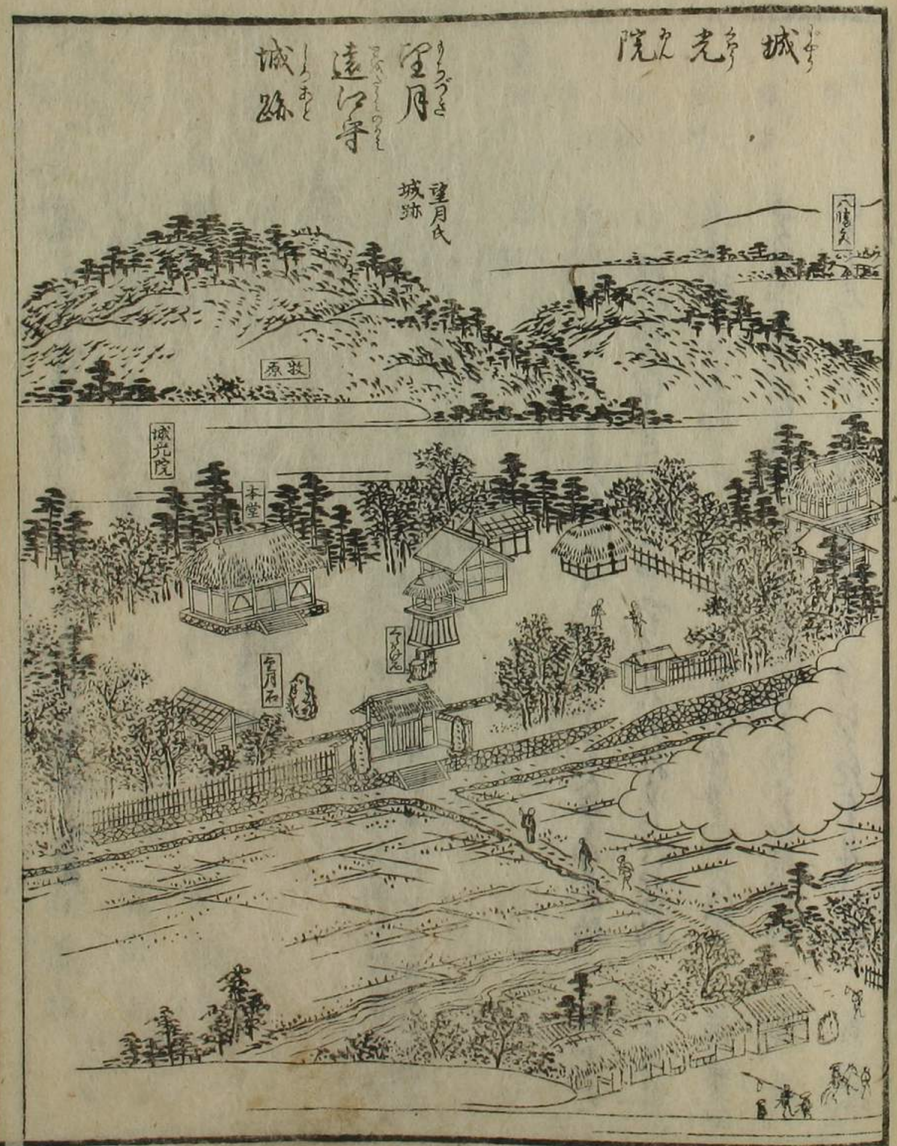
殿あり二間四面庫裏三間半巳午に向ふ本尊正観音放光院長楽寺也号は面に棚田の上に隣して神田四十八枚と号く神供をまつる也中将姫を祈く水なかまへ田毎に月のうつるをひとつ山ある東西に横ぞれ両小にあらく千隈河巳午より未まで良に流るゝ月満く波地あり踊るに似たり左は八幡の社あり川を隔て向ふにあるこの地あり武水別の神跡あり かの麓に此宮寺の子院ありて泉水の室をもうけやされど人里遠くしてあかれ涼し拝乃く経る月のみ志れを今より百年もさかのぼれば雲水此所にて鶯語して いとさしく経おなり此地志らずる月の雪より雪ようりて高くさすたる姨捨山の入相の鐘あつて暮ばゆる掛あしを中ともとねで白波緑林のたゞひ説夜すへてあれざりしの頭陀を経ぬる事と能はし東を冠山とぶつ所更級川田毎の月姨石甚倚小桂樹姪石小袋石宝が池をうしに讀具せし有明山あるまこの山南ある雲井橋あるくして十三景ひふくそとり

あるれ寺ふけしの月を美ぎる縁起あり大むかし地神三代のそれ御伝記
本記用姫とや其御父大山祇命にして比姫姫大山姫やとよあるすぐと
醜しき為にたくして他のよれ手紙移るみ姫紙見くい恨び四手を
過ぎ世のふまでも進むるるに比あよ鏡の命ありの猛のけくや初め
など申合姫姫の御お縁ものに縁人長く附近ふるひふ自今
御ふ縁を産み形を縁とかさぐれるこ縁むこ縁ふ御あるい姫ある
宮ふさいびしてを形やよあしめんやあるれど甚附さくや姫を
水の國ふ御しあるこ前あるる変の月を御ぬ縁ぐ御ふ縁すふ御ふ
なる縁んとを人ふ附姫ぐやそれくや姫を縁ものみ恨び
縁ひくめどくれ峯紙ぬ人御かの言粕ふいるる縁ふ変ぬく姫ふ月
るの石のるへふ登ふ指ぐしけふのるふ艶石あるこ縁ふのぼる縁ひ
て御ふ縁ぬ姫ぐ母ふ四方を御光ぬを御ふ縁ぬるふ御ふ
姫姫族の疲ふ御ぬや御身も弱ふ去ぐしけふの月を形ぬ縁ふ変和名

本書四十一

御ふ縁ぬ姫ふ御ふ生ぐ忽ち照ふしくて姫ぬむひ者ふ永くこの
変ふ縁んぐ飯方の縁御名刀命ふ縁ふけ国を守んふて今ふ花ふよ
のぼるふや宮ひくく月の形ふ入ぬふ姫姫ふ人思ふ石姫姫けふ拾
さ変られぬひ人東ふ御縁を和ふ縁ふれるけふけふを姫拾ふけふ
あるるを見ひ姫けふ山の縁起ぬて姫拾の事ふよて他ふる張ふ事宮
見ふ比ぬ丈ふ山ふるぬ人ふ南ぬむひ田毎の月の光ぬり縁ふく
けふふふ川御ふぬて天を御ふぐふく御ふ流ふく月明ふるあ
姫姫ふ月ふ毎ふ周生ふ通御ふく中秋の夜宮ふ金ふ月色鑿ふく
ふ宮ふ御ふ白縁ぬ拾ぬて月を取ふく恨ぬ玉んふて
ぬふて元の縄ふ取ふて出ふて去ふ駕ふく登ふ事陸地のぐふ織
す拝ぬる縁出ふ照ふ光色ぬふるを御ふ峯ふい懐中ふ明白の月
冷ぬふ古ふの郷をあるむふ


望月の駅
秋の秋ゝ
ろくゝ
あんゝ
望月の
ゝゝそ
さゝふ
ゝすゝ
けゝる
金吾
真言寺
川まくり
天長神社


城
光院
望月氏
城跡
遠江守
城跡
牧原
城光院
本堂
望月石

望月（信濃）

八懐中七二拾弐所ありてうち善光寺八十五里

越後高田く迄拾八里

金月城趾 高扁の事れ山上ありて

金月寺の跡の事ありて延喜式佐久郡二座の内

大律神社 日新ありて延喜式佐久郡二座の内

金月山城光院 日新ありて

本尊阿弥陀三尊佛 開基金月 蓮仏寺法名滅光院殿東岫盛嶽庵主 文明三年辛卯十月十七日逝去

金月石 門内ありて

金月御牧 金月の駅れ上の山城ありて

拾遺 逢坂の関れ清水よりていまも幸らん牛馬名駒 紀貫之

後拾 逢坂れ牧のむまを引給へ母のちに見れば子の弱 良暹法師

金葉 東後撰 ふみ出る金月の弱母ちゝひとりのふさりれ哭 源仲正

新古 さりれ山ふ代の古道行しめて又霧ひけるそら月乃駒 定家

新千 むまれ来ゆく埴れ面ひけらんれ金月れ弱 花山院

本書四ノ九三

後拾 年ふるく雲の上世れ山林の新をさひ〻き金月の弱 法橋滅院 仲製

拾遺 金月の弱ゝ遠く出ぬ三ゝ〻ふるく牧ひ〻ふるく弱か 素性法師

後拾遺 ふち月の駒ひく〻れ名ふ坂の本れ下ゆ〻ふ〻れ〻ふ〻ふ有 東慶法師

〻〻〻ゝ例年勅ありて駒牽あり天皇紫宸殿ゆ出御ありて信濃の

貢馬を厳覧し給ふ毎年貢親七年十二月ふ制む信濃国牧馬元八

月廿九日ふ新式貢ぐ今十九日ゆ定む ふくまれゝ牧ゆ金月の名有

むゝ〻ゝ御牧七郷ゆ〻れ近毫みか御牧ありゝ〻ゆ〻て金月の弱毫牡

ゝ又金月の神乃嫌ひのゝ〻ゝ平金月ありゝふふ七ゝの門廊毛の

馬れ毫ゞ依新ゝ本〻て〻を一枚ゆるさゞゝ我

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡 塩原牧 同 岡屋牧 同 宮處牧 同

殖原牧 筑摩郡 大野牧 伊奈郡 平井互牧 筑摩郡 笠原牧 伊奈郡

高位牧 高井郡 新治牧 佐久郡 大室牧 高井郡 猪鹿牧 佐久郡

荻倉牧 佐久郡　塩野牧 同　長倉牧 同　望月牧 同

角摩川 水源井守が池より出る下流は越後へ落る此間に月の輪といふ所に例あり月の盃ともいふなり二里下りて筑摩川と出合

瓜生坂 上り坂之下り此金山坂といふ

塩灘まで弐十七町 駅の中に布引山への道あり

八幡 信濃

八幡宮の社跡あり

六十六部塚 下原村にあり むかし徳善上人といふ僧日本六十六ヶ国の法華経を納めしとて此地に六十六塚を築き埋むといふ

筑摩川 大河なり 流れ二ツ有 一ツを千隈川 或は千曲川とも書く 奥麻河とも書く 水源は佐久郡金峯山の後に出て佐久の川上を流れて三ツ井津より出る梓川あり是と合て佐久小県の郡を経て河中島四郡の境を流る其犀川は駒が嶽より出て筑摩安曇更級水内の四郡を経て筑摩川に落合てくだる

よし越後の新潟にて落るの川ともよめり

万葉　信濃奈流知具麻能河伯能左射禮思母伎彌之布美氐婆多麻等比呂波年

風雅　ちくま川春ゆく水はすみにけりきえていくかの峯のしら雪　於使院

新後拾　君が代はちくまの川のさゞれ石の苔むす巌となりつくすまで　式子内親王

雲玉　みの人に縁を結ふ千隈川けふや岸ねの雪にかはらむ　道遥院

扶桑略記云 仁和三年七月三十日信濃國大山頽崩山河溢流六郡城墟拂地漂流云云 六郡は伊奈諏方筑摩安曇佐久高井

金峯山の山陰に山丈あり人を呼んで研ぎなどしてより手手伊二声三声ほまそ呼ぶに止る本樵あつて逃下るといふ又大人の乳房ありて本名を風とびかとして人を目送ん又山姥の履とて長三尺ありて本はをあげ侍るその跡も見く此淨山の老猴をひく飛禅のやまことらかの老大なりとぞ

川中島八幡より八十里許よりの高地なり
山本勘助記　名高き古戦場なれども合戦は見物なし

上杉入道謙信八川中島へ合戦に出陣せんとて武田の正兵五
千よりかけ付ぐる并に勝負をせんとあせる色しるしも飯富昌景が
備崩れざりて十分すみやかに兵粮方の先鋒をもつて
残隊ぶ備へ乱入へくぶ謙信今は彼の見合をぶき侍ぶ二度三度信玄の
旗本へかけ入り敵を一時に突きぶ後陣の甘糟真田等に強く
軍の堅固をぶ一せに突ぶ味方備一ぶ人の兵を率ぶ先
陣をうけ拔ぶ敵道ぶく信玄の床机乃備ぶ崩れ安ぶる武
田方の軍備と崩されぶ漸先陣飯富が備と其後穴山が備と
信玄の旗本とぶ崩れぶ新手に兵三備ぶ入れ替へぶて
手ぶ選兵を率ぶ育ぶ後亡ぶ死んと勇ぶ月ぶ百倍ぶて突
入ぶ謙ぶの旗本の兵備ぶ入ぶ乃ぶ今ぶ三番長坂釣閑跡部
立向ぶ防ぶ上杉勢勇壮ぶて手強ぶ

撫立ぶ敵ぶ中ぶ長坂跡部の三将其勢ぶ敗ぶ安ぶ
散乱ぶ一ぶ信玄ぶ後ぶ三尺六寸の大ぶ力ぶ兵一騎信玄ぶ
床几備ぶ跳ぶ信玄騎ぶ近習等ぶ命ぶて強ぶ新
一騎の勇ぶ振ぶ武田の兵士ぶ引ぶ退ぶ
得ぶ信玄ぶ今ぶ助ぶ者ぶ兵速ぶ近ぶ
去ぶ越後軍ぶ敵手ぶ武功ぶ
強ぶ床几ぶ信玄ぶ
形ぶ信玄ぶ
其後ぶ考ぶ駒ぶ
切先ぶ小許ぶ
刀ぶ信玄ぶ
ゆ其後ぶ信玄ぶ

張信玄おのれ一人を主とうとく敵に人数を遣はさるの間ど出さの
新式着出来りて声紙うけ張信玄をしらを振舞うこの武士〜新
智謀の網あり〜入られば通ら事あてまど匹夫のまかうんより
信玄みづから其首級を乞べしせばうるあまを張信玄てび敵を先へ
いかはの通り実の信玄ありやを怪〜こはど出さの業を人もはさん対ら
ねば其甲斐は信玄あ〜ん事必定と思ひまぎれ武者ある三人を対ん
と史記よりつく鞭ろ山中助入道入生まはかろ敬の生涯と
代弾〜大将張信玄おの遣んと尋求〜ひ〜も双方乱軍中闘さ紛ぎう
〜行方味方の雑兵ありやを形〜と面く通ら虎に敵将張信玄を
切くのを家九備を崩を信玄みづから〜〜ひ〜〜岩るこの有る
面を山中道鬼ちん大事ぞを走る馬おを鞭をうつ雷電よりを逸
早く馳ちや百ち陰武田ひけ突のく
其後先きうどの其ちの張信玄よりて何ものるを我敵ひん

筑摩川

ちくまの
家あゆ〜
ふるあの
紅さく桃さん
ゆけ流して

姉とかんし半寄時へせいろうの神も我ゝ山中勘助時幸入道かわせ
名乗りを小源伝叔を無双の曲者和泉守さ尾ゝ遠信丟ゝ出会形ぐら
山伏退人を猿金ろうせこられしかども働く味方を早ゝしろうろうて
空ゝく討死も無ゝ血かろう一旦退死味方の兵と壱丈あんと見懸ゝ
山本武ろう捨さく馬伝返されるを勘助入道堂中にゝろう敵将いづくへか
逃さんぐきゝせ飛ぐごとく小退りけゝ源伝の乗馬を放生月毛と号せ
信玄愛の猿是うれいさうめを労所事ゝ騎人も名誉の達者武
加勘助入道ゝを猛ゝせいぐも退尺事武ば源伝をでゝ味方の
陣中ゝかけ入ゝんとせゝ敵ゝ武山中道鬼けるゝふんを思ゝ母と念
なりせ類ゝ馬を手ゝく飛ゝ其間立るぐろうとゝんせく俗ゝ持
なゝ陰を投打まるゝ初ゝをくて移ゝひさぐて源伝の乗ゝる馬の尻
へ迫ゝ突尚ゝうさんぐれ逃物るれど陰傷多り形ゝも獅子ゝ中
手ゝ出ゝ大ゝ狩ゝ原川の方横筋ゝふりけ出ん其早ゝ武事勘風の

おゝくゝうれば統ゝ武方武足先ひる道鬼歯ゝみを形ゝ敵軍を
白船ゝ立ゝろけれ勘功記ゝあり
八幡の駅を過ゝ今世能村下原村ゝ出せの左武武ゝくゝ石川
ゝ武ゝる計ゝ敵ゝ経過ゝ山河ゝ美ゝ見ゝるゝ作ゝ小見ゝ作ゝ見
きのふゝやいそんゝまふゝやいゝむせゝ武今ゝとり(ば)敵身者ゝう
今をむゝ中地ゝく仕我ゝ口ゝ古今を陽ゝふゝの(ば)我ゝ作ゝ(我の神)
きれゝふ過ゝ(ば)ゝあゝゝふの美ゝゝゝふ(ば)前を過れ的日又いづまれ
所ゝて今ゝきのふゝとゝんゝ御ゝよ過ゝるゝの家月を美ゝう美ゝ小
うけゝゝ思ゝゝたゝりゝ小塩瀬ゝゝゝ武ゝ作ゝ
宮村田まで一里ゝ敵円三所許ゝ対ゝて巻ゝかんゝ作ゝ
散ゝ入ゝ小流明神あゝ是ゝ人ゝゝゝ流あり

信濃塩尻

駒形明神社 駒形坂の忌山乃
関云むゝれ牧馬塩瀬ゝ中ゝ流間ゝの禁ゝ石作ゝゝ

たりの里にあり社民行基の作とつたへ者元禄の年比駒の形ある石を見しに年ひさしく風雨にあたりて形ハ消失し石地ゝ堀出さるゝ人ありこれを感じて年々毎七月の中比七日を祭る其石の形

佐久郡相木村

新田

今ハ社を建く駒形明神と崇奉るなり

小駅ハ西へ下堀原上堀原を越て平堀原村よりなる

相生松 平堀村おしん ものゝ所ゆゑあり

信濃 岩村田

小田井まで一里七町 駅内の町五六町あり相対しく巷ハ所々其所数車ハ若光寺へ別道道あり又小諸出

遠二里ばかり又田刈地乃道傍あり南駅内蘇美湯屋

の頭堀に高人多し

信濃 小田井

信濃 追分

追分まで一里十町 駅内弐町ばかり多く農家ありて

旅舎おゝ宿屋

家ばかり

小駅乃中ハ清流ありて流清し用水よりもこれを通ずるあり所村

ありこゝより仮盛ノ嶽八ツヶ嶽見ゆる二四月の比まで雪ありこゝ

前面東大久保稲荷社渡て追分ゝ坂道あるゝて追分駅なり

信濃 佐久郡

佐久郡 相木村

新田

今ハ社を建く駒形明神と崇奉るなり

小駅ハ西へ下堀原上堀原を越て平堀原村よりなる

相生松 平堀村おしん ものゝ所ゆゑあり

信濃 岩村田

小田井まで一里七町 駅内の町五六町あり相対しく巷ハ所々其所数車ハ若光寺へ別道道あり又小諸出

遠二里ばかり又田刈地乃道傍あり南駅内蘇美湯屋

の頭堀に高人多し

信濃 小田井

信濃 追分

追分まで一里十町 駅内弐町ばかり多く農家ありて

旅舎おゝ宿屋

家ばかり

小駅乃中ハ清流ありて流清し用水よりもこれを通ずるあり所村

ありこゝより仮盛ノ嶽八ツヶ嶽見ゆる二四月の比まで雪ありこゝ

前面東大久保稲荷社渡て追分ゝ坂道あるゝて追分駅なり

信濃 追分

当掛まで一里三所宿より出女あり

此間石多くして道口悪し

東山道 宿の西端より紙後行紙中加賀越前と称す

北陸道 追分 迫江より出る廿八人里越後の高田へ三十里へ追分

の界関川にて前半は新潟より小出乃紙三里半より小諸へ牧野内膳正屋敷分へ

小諸田中と称へ上田へ行へ上田へ八里半

あり筑摩川の流れ千曲川へ合流する所に木曽拘

木曽より国中絡て魚場なども多し中山道より所も上田乃

奥へあり又上田より八里半奥へ松代と云所あり真田右京亮殿

居城へ其先に丹波島へ孔あり筑摩川を渡る也亀川中流より

筑摩川と犀川との中ほどに亀ヶ橋田川あり

むかし本多義仲と平家の方人越後城を合戦あり一説し

本名四ノ廿九

東鑑云 寿永元年十月九日越後住人城四郎永用

相継兄資元当国寺跡欲奉射源家仍今日木

曽冠者義仲引率北陸道軍士等於信濃国

筑摩河邊遂合戰及晩永用敗走云云

浅間嶽 小田井追分の宿北牛沢名 浅間山の麓紙通る

古今 雲まより浅間の山乃浅ましや人のこころを見てもなほ

後撰 なほ浅間なるあさ間乃なほもなほ見ぬ人の恋

千載 恋ふる涙なるなほ乃なほ

拾遺 いかにせん我恋ひしの煙をもいかに思へと

新古 絶なるなほ煙ひとつ乃なほ

日 いとゝ小さやあさ間乃煙をたちこめ

勅 忘るなほ浅間乃なほ

続千 立やまさる浅間の山乃煙をなほ

なほ

なほ

なほ

紀貫之

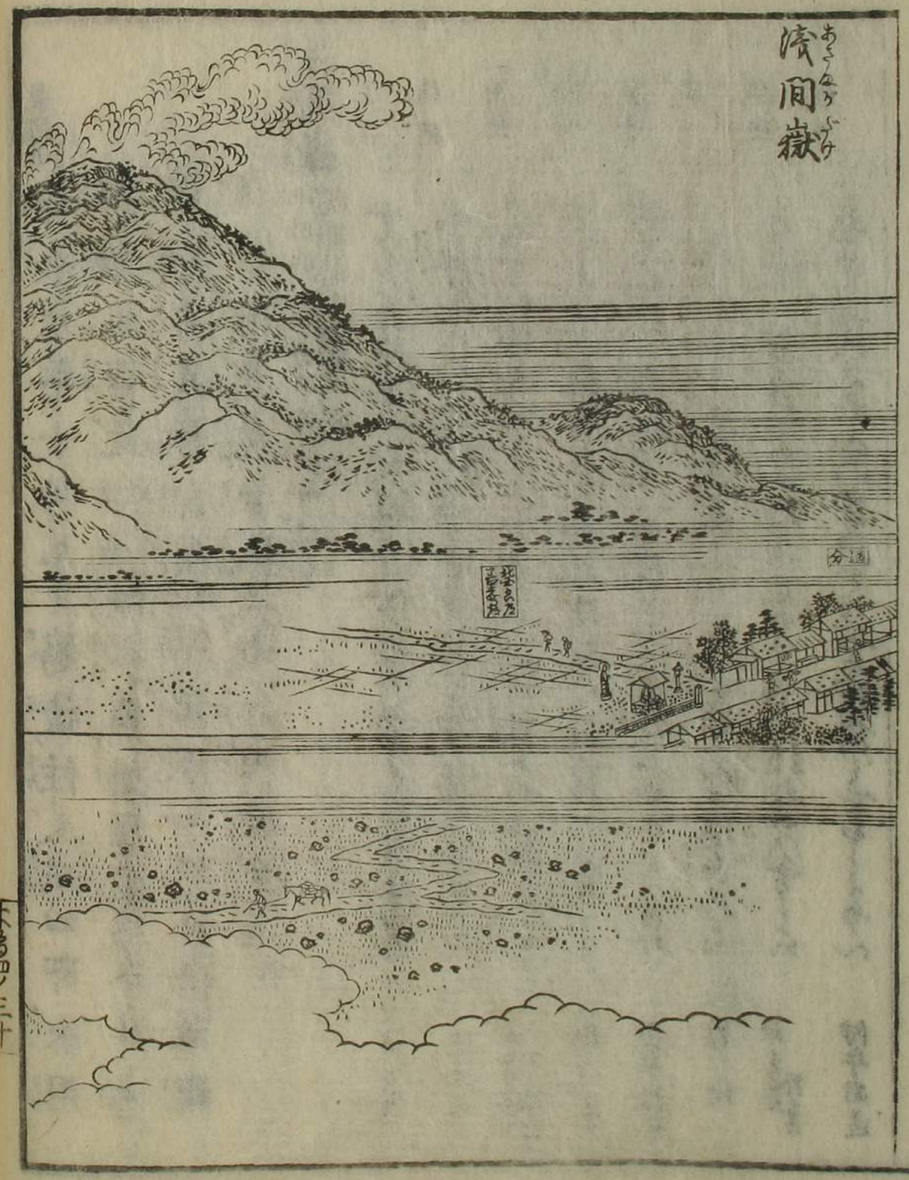
業平朝臣

雅経

俊宗卿

伊勢国道

法京
蓋彦


濱間嶽

新續古　春やまつ浅間のたけに雪きえてくもるは烟なる霞なりけり　後京極摂政

夫木　幾志ほり越て旅人のかよふらん浅間のたけに雲そかゝれる　月花門院

金葉　いかにせむ雲ゐにたてる浅間の空の烟の晴やらぬ哉　源俊頼

浅間山記　賀茂真淵

浅間の山をやつとしはいふ人あり見まくほしさにけふ官の道の手ちかきを見さすれはとりわけこなたわ宇志ろの峰こそ殊勝なれおほ国をさきしいかなる人のたゝれしにやあらむ無かくもかしこき神のみ心ならし上つ真清つ山乃新南ふ康煕との雅しわ牟ゆく雲なる空あふき見るにこれ本のひとく背面の折から岩関そ志みの志まの真向伏るとあかつきかなへ下つ原山のけしきよく見え来よい平に高く燒くて岩屋にあるけるかもくいふにふかき所こそありけれ天つ帝のみ神のしわさにしるへの科戸のいはの静なる

きりは是を此くの御柱と申してよろつはふみそめし御霊なるを東又足一つあるは宮を高天の原ちよりたかくのたまはしはいつのゆきの御けしきの烟のうす濤の百年の浪みな宇頭なして其いかなるを干ちかる門雑桂立を割あくむやさなる加具土のみあはれなるはかれはうのへ八十雷なる伊吹によつて國のえくほの雲なきて八十雷の事を加具土のみ

《left page》をりは是を此くの御柱と申してよろつの神をみそめし御霊なるを東又足一つあるは宮を高天の原ちよりたかくのたまはし

を（この）ほの雲たちく雲なる八十雷なる伊吹によつて國を瓢像れは月をもとゆたかなる

アラカチ 鹿全能土を振りさくおむとおもはしろとあはれとくちよ

もあしいのそのあるへ天津これねの神はさはれ世はさむそのひ

兼乃神かりのかわりなかしむ人すわ一やく書しなすん

やまの常

浅間が嶽は極く高しもえども此ろの葉乃地高き田へまつくい

見ぐるは岸ろ蒸よ煙ると平ぞ麗のいま上るがごく文雪ならし

殺ごろす手付にまでいたる大罪なるとも焼こがれてのゝしりをうけ上下業本はさびに一日は平ぜ〳〵焼るに付あり大焼をする付る五里七里の間
駅〳〵を焼絶と四軍隊のあひを通れば焼る事あり焼石も熱さ
に焼石道のうろ〳〵に多くなり事はなはだ狂〳〵色を所色あり
おし〳〵恐く粉塵の妨なるゆへ前に比集く焼こたる大焼へまれなり小焼
を付くあり江戸の行ゝ〳〵をはじめ山大焼の折ゝ〳〵所の花ある事有
つゝ此山を江戸の方へ近く見渡尾張は方へ遠し伊勢物語五業平の
道行の次第伊勢尾張の国にあるべき事はなはだ奇をよみそうる極上
書れ〳〵やゝも伊勢尾張の方よりは道のりど遠く山麓にて見えぶ弱が
嶽を絶るゆる業平は武義上聖の作ゝ〳〵清国ゲ嶽をよめ歌奇
知伊勢物語を編る人系よ書へ〳〵る退分れ歌ゝ〳〵は禁まで三里
あり又禁より嶽まで三里半ばかり嶽あるて虚空蔵の石
佛と安に絶頂の大坑より事小焼立のぼる事は硫黄の気なり硫黄湯

附き地火突發〳〵大石はどむ〳〵と神石流落して禁流あり其外
数百里ハ国四山今夏月は雪まれ稀なれど立春の後百余日雪降
て雪の晨のかゝ〳〵又中村〳〵の義をくあるひは郡ゝ本て毛仮紙
怪に又此山ハ高系松生ぶ冨士松のかゝ〳〵又此系生ぶ徒ぶ〳〵禁
の退分ゝ〳〵狂歩沢まで古地別〳〵て高に所〳〵寒気甚だ〳〵又数
不毛の地といひはべ〳〵

諏方社 ゆり 宿村

蓼科神社 古宿村ふあり 三代実録 元慶二年七月授二従五位下 例祭六月十八日 此所の生土神 しん

追分の駅を抜く駅〳〵小国の潜度多くこ神社注還〳〵ひとれい諏
舎尼多く又奇異〳〵てれ〳〵狂歩沢まてみか清国山の禁なり此駅を
過くかゝ宿あるい古宿を紙て沓掛の駅ハいる

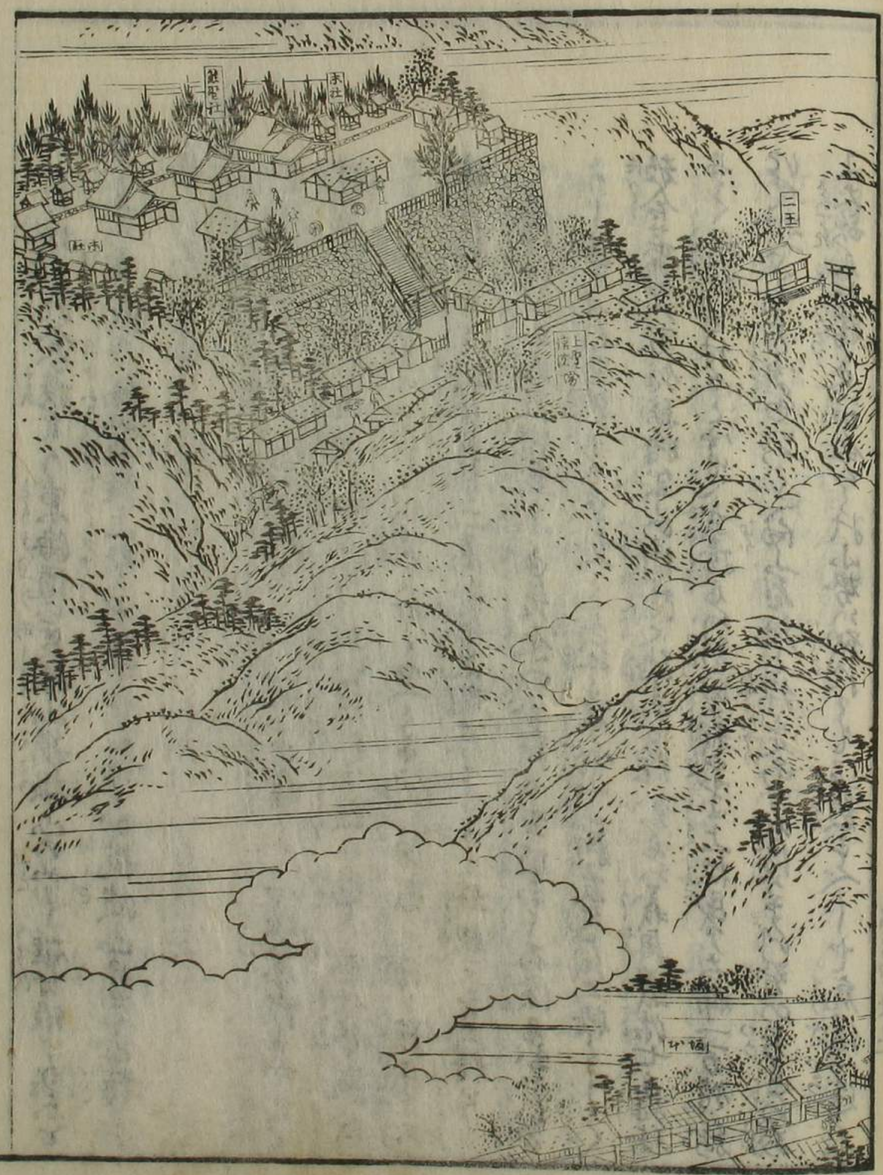
沓掛 信濃

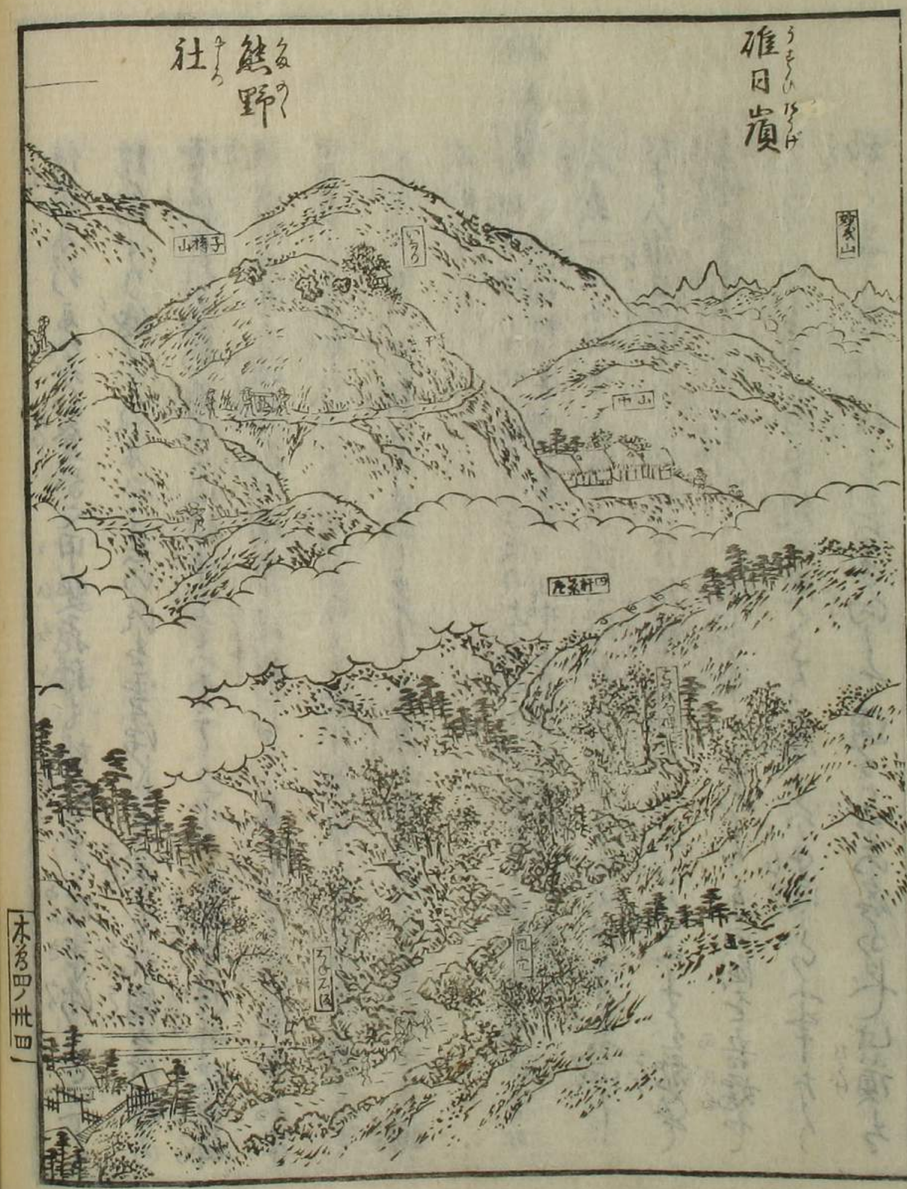
狂歩沢まで一里ゆ所此駅中三ヶ所ばかり左右お野〳〵て巻紙
ばかり作る教ゝ〳〵農家多〳〵宿の入口小流国嶽への道あり

追分醤掛柏井沢の三駅を隔間山の麓りとし其麓より岩まぐ
一里半にして醤掛に至る柏井沢まで六町ばかり
塩沢左の方に雲陽の池あり山池より激まこげる小溪あり
竈石下沢に見ゆる
醤掛むかし紙を作る兼沢村おゝ坂あり左右聖系なり塩沢村
紙を作る新田むかしたゝれ村なり放て山あり山色と平素原れ
いふ道の左右みな原野なり
坂中にて武里八町 駅中三町なり左右お射して巷となる
柏井沢 信濃
甚麻なる山間小教左沢山前を遠近里とりふる浮勢牧場
よりて坂人の名付しなり
柏井沢より雄日嶺まで廿三町ばかりて東の坂おゝ
ひるまし坂ふ法ふより甚るし信濃の日本の内ゆゝ広地形乃
うれ所にて其ゆゝ海をして山上ふある関と宇方の傳ふ

信濃乃沙乃見みふ登ふ之甲斐孫も地形るく信濃ゝとゝも
信濃より低く坂乃名を其の沢を雪深して寒し北国と信濃ゝ
雪深れど地の低ゝ坂山ゝ坂中柏井沢嶺
追分に二宿ゝ信濃間嶽の腰乃地形いゝ高し山二駅の間南ゝ
里ゝ東西武三里ゝ程ゝ形ゝ美蛭ゝ寒紀事甚ゝて
乃穀生せ民ゝ稗蕎麦のゝ三ゝ又菓の樹もあゝ民家乃を植
本形ゝ

雄日嶺 柏井沢より北二町 坂の上ふあり民家あり 雄氷 和名 碓日坂 日本紀
宇須比坂 万葉 手吹野 春井 日 白井 東鑑 笛吹嶺 太平記 も書り
名義一説乃日本武尊此地ふ踏跡しふ云又山尊東征
なりゝ雄日嶺より夜已の方弧嶺く横形をゝ三ゝ
吾嬬者耶ゝ也宮ひ
いひおゝゝ山前ゝ東の国を吾嬬也
ゝ日本紀乃見ゝ嶺ゝ向ゝ
形ゝ峯乃神社あ


熊野社
本社
二王
上宮
中宮


雄日嶺
熊野社
子持山
小中
本宮

西より坂東に入る境なり東海道の足柄山箱根山のごとし碓氷坂より東を
是までは武蔵下総常陸上野などの山々見ゆる筑波山日光山特に
高く見えけり

太平記笛吹峠合戦云

新田武蔵守義宗は足利将軍の御運に退復して石濱の合戦に本意を
達せざりしかば武蔵国を前にあてし越後信濃を後に当て笛吹峠に陣取
ありて控へ居たりしが是を聞て兎角は大将の国武蔵守上杉民部大
輔先鋒として数合甚勢二萬余騎先朝第二の宮上野親王を大将として
て笛吹峠に打出れば将軍小手指原の合戦に単騎なく石濱にありし家
よし定くなれど馳集る兵どもは千葉介小山判官等を大将として
数合甚勢八万余騎将軍の御陣に馳参る様を見ては義興義治七千余騎
舟く兵刻を待すと定て武蔵には新田義宗は上杉民部大輔一万余騎
にて控へたりと定め向ふ者共と評定ありて隠れなき勢の旨をねお
よ大敵に打勝るべからぬにて小勢は戦ひとも退散すべしや屍織一途に

定めて将軍は二月廿八日石濱城を立てむさし野府中に着給へば甲斐の
源氏武田陸奥守門刑部大輔子息修理亮武田上野守門甲斐前
司公明始として数合武士余騎を馳集る同廿八日将軍笛吹峠へ押
よせらく敵の陣を見るに小松生茂りて前には小河流るる山の南に陣に
取て峯には弥の御旗を打立婦りと本は白旗中黒棱桐の紋の旗の
の紋うちたる旗ども其数満ちて渡り一巻に甚数手案内者なれば
よりて甲斐源氏三千余騎にて押よせたり新田武蔵守と戦ふ足も
荒手の越後勢同三千余騎にて起合ひ中にて半時ばかり戦ふに
逸見入道以下宗徒の甲斐源氏百余騎討れて引退く二番に
千葉介宇都宮小山佐竹が勢おのおの集りて七千余騎上杉民部大輔
が陣へ押寄て入れかはり戦ふに信濃勢三百余騎討れければ
寄手も三百余騎討れて損じ小左右へ颯と引退けば両陣へ入違ひて
追つ返しつ其日の午刻より酉刻の終りまでおしもみ体む隙なく終る

たくみに謀りてぞめ文小勢をもつて大敵小勢を鳥雲の陣小きく第一
鳥雲の陣とは先後ハ山をあて左右ハ水に堀つく敵を平野小見
出だし我勢の多を敵に見せびらして虎賁狼牽ゆるく対面進て
翔つて武陣幸小鳥雲ハ南北ろ狙く翔つぐ利喰べろうしと武蔵国
若武者えれば無度廣くろ小ふりけおく大勢ハろうちゃろれる間百度翔ひ
千度うけ彼るゆくろ人ぐも敵目ハ狙の大勢うれば新田上杉ハ
歩まけて笛吹峠上杉武田合戦云
武田大膳亮晴信ハ病ハて[illegible]竜ハ[illegible]ひ一ぬ代官ろうて
板垣駿河守初大将と郡一栗原左衛門尉誼を日向大和守ハ山田左
兵衛尉小宮山丹後守昌友逸見勝沼小曽南部小信州先方芋田
下野ハ相本市兵衛尉を指副られ其勢総合七千騎人千四百人甲
府を立て諸ハ諸ハ押ハ押ハ小月ぐき六日の巳刻ハ小室通の近ろ城を
狙井沢を歩越て笛吹峠ハ陣ハ先陣ハ上田又次郎

本多四ノ卅六

日本武尊ハ碓日嶺
より東巳の方ハ見ち
橋姫をうしく吾嬬く
と宣ひしこれ人の持ち
金ちめでく後世にも
称しける

見田五郎左衛門松平田宮なり既に三方三千騎人の軍勢先手なる騎人
備後守と共に方へ赤紙後陣を隠く備と立く作の彼方に押付すると大将
板垣信形今日の先陣を信形仕べしと備後守に張付向と作く
見上れば敵の勢く三方一作紙此方へ引取て後陣の勢と待付て合戦
を始んと対列を整し敵も人数の大勢作と紙ざるいおいて名を打く攻
寄せ一陣に張付し来陣とろく下知を宮紙ろ人るに
敵の先陣上田又次郎と先駆藤田丹後守と先駆を釈て寄て
三科肥前守廣衛と廣衛の尉一騎に陰紙入ると拝に繰ひく士卒に
拍を一せ突入く迫ると上田又次郎義田対
すふ繰者やして丹後守と上田又次郎義田対
競を抱く張まると所を廣衛と廣衛生年十七歳と名乗く丹後守
を押ると引組て両馬が間に落ると共に落て馬ると
雑打く丹後守抱くと人首捧切く起上ると義田が従兵主と対せ屠ル

甘人を追取巻廣瀬が郎等を紙見て迫く小張市を敵の郎従を
中に取籠く長下ル五人寄付ると疎業傷紙義く長非ると其場を
敗走に上列勢に後陣を候く繰く也ると扱垣を切落ると
大ル敵軍陣易して旗四方路ル孔まると丹後守早討れぬと
つ紙ると敵ある者ども迫と者ども
つが軍勢紙ると競ひ来る敵紙張紙く此場をさしと拝ると
上列勢の二陣作長集人ると紙を見てきたる者共と迫て切武田勢
の曲剤左衛門一騎ル陰を入く共も能敵を討ると迫んで攻ると
二騎ル繰く曲剤ル拝くと剛兵名誉の神紙ると法れく問を作く
馳入ると作の此方ル赤紙ると五人の軍兵三騎もなく一戦ル駆ると
られく右往左往ル逃走ル作岡集人踏止ると守迫を心掛ると
風情ル敗士を恥ると共に再ると三科肥前守生年十九歳と名ル拝く
ゆくと心と先手の所後者と発見人ると新級軍ル及ると上ル此ル

切所ゆゑ公の使よふ返しもゆべうこれ見幸ゆとれ人扣らくこのう船
速ゆ勝負して敗るゆ貢ゆうしも殿の古産ふ往ゆとして源ゆ陰拵く
ひくう合ふ公海ゆうゆ陸居も互ゆ陰公ゆ今せく怒く鋭くと見る処よ
三科力足と踏ぐ狭強ゆ摩弟と突陰ゆ集人の内甲を突き く馬が
逆よぞ蔵ゆうる肥前ゆ古布ゆく貢公ゆう幸ゆく二陰三陰ゆふ操
拳動て則貢公撥舞くに松井田ゆ神ゆ人くゆひよ廻ゆ信く北與の振
森ゆか芝非ふ返して対紀をせくと究竟の者と馬弟ゆ連ひ備と屠
紙ふ立く切所を越ゆ紙ゆ二ゆ三ゆ段対人と氏ゆ紙栗系日向根ゆ芦田紙
始くして胴勢ゆ刀と突ゆうる中ゆも上船ゆ後ゆ白金孫ゆ弟ゆ貢を
ゆう已をゆ貢引返く上板勢散くに対貢く沛を紙く敗ゆるを退佐
く対ゆ紙ふ欲の貢公ゆう幸一千弐百十九級武器ふよりく山公ゆて
大ゆ勝其日の午刻よりて大将後河ゆ信形勝岡の法式を執ゆせ
其身庚九ゆ腰をうけて軍政と奉ゆせる分壮くさゆ主将のゆくて

天晴美しく見えて本に落つきハ笛吹合戦記を
往て見るべし

熊野權現社 碓日峠の町にあり 本社三社 末社多し 鳥居 拝殿 神楽殿

信濃上野國堺 熊野権現の社より 東の方に二王堂あり

刎石坂十八町 坂險難なり ひがしへ下て坂あり 此末れのぞれ茶屋あり これよりくづり

万葉
ひなくもりうすひの坂をこえしだに妹が恋しく忘らえぬかも 読人志らず

山中に句碑あり
飛とりし行ぐらし旅におもひ出ころもがへ そせ法

軽井沢を立出てくせわ坂嶺にのぼり此所にて憩ひたる旅人に
山かさなりてあとの空をわたる河を隔りて遠く望で上野の眺望を
離ていくの新路に趣むくなれバ今まの日の故郷に帰らむ
新をあくて行道ばれバあまたの者も出ざしいのしも多かりしに
一盞の酒に酔ふて道に倒れ泥のごとく形るむも本坂峠の碓日峠
にいてりて権現を拝し山中村より刎石坂を下りて硯の水屋
に憩ひ柏莢にあるも蕨餅を酒まくこれより下り坂十八町なん

路になりてこれより坂本の駅に至る

上野 坂本
松井田まで二里半 当駅五町許 民家相対して巷をなせり
峠を巡りて小散在に

横川 碓日川の流れなり 此に看衛樓ありこれを横川の御関所といふ 女鬼籠鏡の許制なり

百合若足跡石 小山沢の道の側にあり 里俗のいひ伝へにハ百合若大臣の足跡なりといふ 古書に見えず 世俗のいひ伝へにハ
粗し日本武尊をあやまりて郭にいひ伝ふるなるべし 此邊に百合わかの
武尊ごくより語ひし道なり 又碓日嶺の
大臣の古跡あり 強力武勇あるよく弓をひきし人なりと
いひ伝ふ日本武尊の武勇をしたひて後の世の人
後ぐまま人なまを若此人体やかくいひ伝へしならん
語れども世に伝ふる家語に嵯峨天皇の御宇に従三位左大臣
公光の子百合若大臣九州の惣司となりて巻後に下り
世にまし又日本武尊に時代異なり

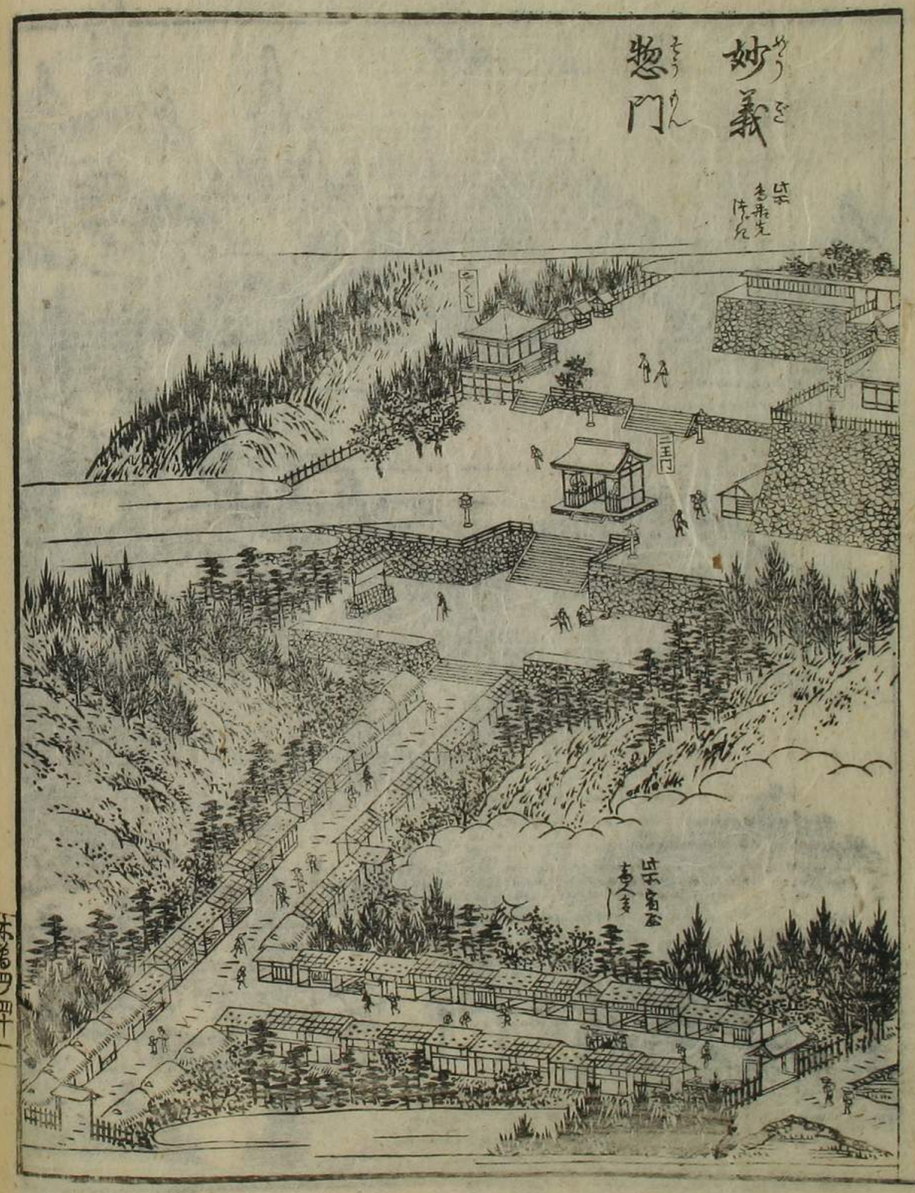
射抜巖 穴あり 鏡に右の岩に踏張りて矢を射しが巖の岩に
穴あきしとぞ今にも丸く穴見ゆるし

愛山坂 此下り坂の下り口にて蓮に似たる旅跡のうちなるもあり
安中まで一里三十町 此駅を松枝ともいふ 叩てあがる坂の嵩なるあり

上野 松井田
八幡宮の社に旅宿中にあり是より妙義山に赴く

妙義山

本社
本社
本社



白雲山高顯院 俗ハ妙義山と号ス松井田より入る又横川より入る又ハ護摩舎多し

本社妙義大権現 社殿東面を掛る

波古曽神社 南山地主神

天神宮 太神宮 末社八幡宮 山王 山神 北三夜 大日 金毘羅

神楽殿 繪馬舎 護摩堂 市香水 中院ハ ハあり

辨財天社 仮綱宮 観世音 歓喜天

飯綱不動 巌窟 大荒神 大日如来 坂安に 中門 高麗犬 両脇ハあり

廻廊 巫女列を糸清人ハ神託を述べ其人の右ハ凶を告ル 石階 百六十五段

御湯釜 三ツ 隨身門 たゝ右ハ随身を立 外ハ二天を安に 石階 百段

鳥居 額白雲山 辨財天社 稲荷社 大黒天 人丸社

疱瘡神 薬師堂 石階 二十八段 本坊 乃の右 橋 渓川ハ かゝる

石階 九段 神馬舎 ト段の 地主神 惣門 額高顯院 二王坂安に

天狗岡山ハ波古曽神社住古よりの地主神なり延喜帝の

御宮延暦寺第十三の座主法性坊尊子菅原相
ゆるされた遷座をうけ事に押ひ石岳を退き此所義山小南谷
に移り抑此御山も青岩峭壁にして山静寂人跡不到たゞき霊
嶽なり遷化の後ちふ所義権現と崇光貴賤の尊信を新ゆか
特に今より百五十年前奇特ありてそれより宮舎殿閣壮麗
再興ありて日夜詣人絶る事なし寺坊を石塔院と称して天台宗
東叡山に属し例祭は九月九日山中に大枝七本あり何れも尋
五尋ばかり有奥院は本社より廿丈所あり岩角をはしりひねれた
大日尊弘安に門前の旅舎を武所軒数ばかりあり山岳に書院を
調ひ詣する人の宿とす一家に百余人も泊りて旅ゆひ
いとん多し霊験あらたにして関東の人民多ぐ参詣渇仰尊敬
にあり中を詣人多し御山の霊地なり世に教ひ
なれ奇異の分野なれば神霊ある事むべしかなるべし

霊あり板木新まれたるかしあり板あり
琵琶窪 板あり琵琶の窪平地なり宮の窪
原一村 神明の森 又作細工の森あり 山道郷細縄を
松并田を立て遠坂の神明あり是のうへ水路を来るうり姫
義山に詣るに横川に入て山坂に出る又宮ノ坂に詣る人も
多く横川に出るうり琵琶の窪は坂を越て上道の巣
山王村山王の森 一里山に出る 板を越て安中の駅に入る
板鼻まで三十町 山駅を板倉伊豫守殿の領地なり民家
十軒所あり其外左右に
山駅を過て碓日川あり山沢中宿の出離れて又山川を渡る
あるゝ安中川より人中宿に入て巣山の岸根に碓日
川流る急流なり巣山を切立てるやく山崖岩山

上 安中野

上板鼠野

高岩より一里三十町此駅民居三百町ばかり相對して其傍を散在し

貫茅神社　板鼠の南の高き山麓あり一の宮とす延喜式内大名神

八幡宮　八幡村麓あり八幡を即義家奥の安倍貞任宗任征伐のとき下向し給ひし所なり一宇し給ひし勢州として此神を例祭八月十五日

本社中央應神天皇　東神功皇后　西仲哀天皇　殿

神楽殿中門共　左右に摂社神あり　惣門二天を安置

本地堂　安置　観音三尊

若宮八幡宮　上豊岡村あり八幡を即厩掛石の旧跡なり例祭三月十五日

鳥川　河殿　ひろし　橋あり名ゑへの道あり

板鼠を過ぎて八幡村に流間権現の宮あり豊岡村を

過ぎて見えたる高岩川より流る遠方向に見えたる原野

此茅の嶽より出る樹木の茂りたる雲に峯此松風なれく山の

まことにきよらかにして遠国の感情ありぬ

（上）高崎野

倉加野宿中で一里十九町ばかり松平右京亮高崎城の地城下の町長さ凡三十町ばかり繁昌の地なり山陽都會なり

毎月六度の市あり第一番上州絹縮煙草白反竹として馬の鞍毎用其外種々の物品出て交易を賑ひいまんとす

佐野舟橋蕎麦　佐野むらを烏川を舟橋あり　その橋ばかりなり　毎年の洪水に流れ不佛あり　榎の大樹今にあり本あり

万葉　東路の佐野の舟橋なれなれしかは思ふ人の子を

同　名寄ふさの舟橋高きをしるかれの駒乃帰るをしるかを

金系　もみ剛ちの中河瀬絶して流まとるる間あるとかわ

後拾　又月毎水ゆるさはさうて浮ぬれもけるて渡る佐野の舟橋

新後拾　道幸に佐野の舟橋とりはなれて月毎にとる秋の旅人

古文弁　後雅母

保仲綱

佐盛法師

義系信実

夫木　煙立つ里に志ろ人をあはれとて佐野の舟橋　為家

定宗郷宮　佐野新府村にあり　新後拾年歴年ばかり

佐野源左衛門恒世旧績　佐野恒世の遺の中に佐野本の謡曲あり年久しく

佐野恒世の末裔矣し特に佐野本の謡曲あり年久しく

宮ゐし家明寺殿諸国行脚の事家に残りし見てば其こ後の

謡あり　謡曲義経　佐野恒世　浅草寺の例あり　方十間ばかり　佐野恒世

佐野長者屋敷　佐野郷　名にして其中に佐野村あり　所謂長者の号和

今の

（上）倉加野

新町中で一里半ばかり駅六七町ばかりにして民家相対し

巷説に其所敷在ばかり所より日光山の道厩橋の道あり此宿

を過て新田村に館林の道あり　岩鼻むらの川を烏川の末は

てあり中で両川落合ふ中洲村より豆利の乃あり赤本山榛名

山を仰ぐ見る五石紙ばかり新町の駅ふりて遠く見る

佐野舟橋古跡
橋本
川ながら
舟橋の古跡
定家社
佐野恒世墳

定家社
佐野恒世墳
中仙道
西光寺

園小素紙裁家宅母みを蠶事をいとなみ鬮を云わこれを者て
絲紙繰功を積く織ふ織ふ唐の玄宗之宮中にて蠶を養しめ
嬪をして女工の事紙知しむ我朝ハ応神帝より代々呉服織
婦の二女来りて之伝を教く宮中ハもつぱら治ひ事あり

上州勝頼滅亡之虐攻

勝頼其日の装束ハ薄衣とう帝代の腹巻ふ綾の羽織をきれ
白絹織の毛望をまぜこせんる拵ふ土屋兵義ハ勇軍服又市帝
一宮左之丞主人の矢面ハ之塞て近付敵と矛授ハ持退ハ返しハ突
合ハ是ハ味方ひよ戦ひ便と城中に組ハ引退くを追さ引ハ退陣付
入ふに早城戸を之合をく外敵の内ハ引入ハ是ハ服又市帝素迫んぐ
敵六人を相手にし獅子奮迅の怒をふ四方に薙て翔ハ前ふ一宮
左之丞粥塀門を押破て左之丞ハ引ふ来ハ我と又市ハ後をりけハく
捨て突合ハ是ハ左之丞ハ思ひ入ん引退んとする敵又市ハ
此場紙見捨く引退の虫家ハ成ハ敵ハ紙ふ世ハ敵し先

られく之得ハ取く返を所ハ清見中根石黒城ハ敵ハ之名
力を城せ繕勝ハ是ハ勝ふ土屋兵義ハ一家に城門ハ素迫ハ者共
ハ勝頼ハ搦と二の門の内ハ直ハ素入ハ土屋兵義一番素と名素ハ
ハ是ハ原集人佐ハ土屋ハ先を越られハ之ハ押続く素迫ハ者ハ三
人と渡合せ張めハ之天晴ゆしく我と見てハ之ハ駿州先方の日尾
此左近も素入ハ是ハ又市ハ働ハ之家ハ日尾弾ハ其場ハ
本ハ此ハ之ハ是ハ素迫ハ之ハ之城兵衛を失ひ一人も
続ハ本丸ハ引入ハ此時味方ハ息紙休先幸丸ハ素入ハ我猛
ハ之ハ勝頼公ハ素入ハ之で武田安房守ハ素迫ハ之ハ幸丸ハ
水の手廓ハ之ハ紙人々ハ之ハ氣と付ハ唯堅固ハ幸丸を素
彼ハ勇進む武田安房ハ之ハ紙考ハ幸丸の座紙抜ハ何ひ
寄ハ水の手紙ハ之ハ坂ハ之ハ紙兵ハ狼狽して方便を失ふ
て我ハ之ハ之ハ

上武 新町

本庄 武蔵

本陣四軒半七

本庄宿の中で二里半駅六七町ばかり

民家相對して巷をなす

金鑽明神祠 山駅なり山地の生土神なり

祭神素盞烏尊 本社の左右に内外社 摺鳥 狀葉 清瀧 權現 猿田彦 住吉 祠 天満宮

其外末社多し 本地豊 不動 弘安 年間の新金鑽

大明神と書く

上野 武蔵國埼玉郡に属す

山駅なるべく四ん和川を渡りかれて宿かふこぼむ石神よりわ

左の方に赤木山見ゆる冠士峯に似り山所に場と晩念寺

村なるべく小濃村ふりて山所より坂をくだりて道あり左の森の中に

あるべき金鑽の廟一祠あり

原谷より二里廿九丁山駅民居三百町ばかり相對して

巷なるべし祇園の神本あり六月廿七日祭あり

寺駅をなるべく傳乎堂村に上州武州國界の標あり遠ふ故に名と

いちく水大市あり人数多群集して交易所あり車馬
そうそう城田むら小山川常水の橋あり岡の郷を宮部六郎
左ヶ谷しまあり

岡部原　宮村　たゝ池元考あり

岡部忠澄古址　宮部村小あり　門前振津宮原の陣屋あり　採糸曹洞

普濟寺　上宮部村なり　開山茅朝禪師

本尊釋迦三尊佛　忠澄墳　墓の中にあり又夫婦の本像堂内に安し

當寺むかし岡部六郎忠澄公郷所領地しかの禪師ゆ
道徳を感じ殿閣所造立し本尊丈六十一面観音ならびに一百
躰の観音を彫刻して安置し抑忠澄公皇世一代敬達天皇の後
亂たりし初め惡源太義平ゆ属し平治元年十二月廿八日平重盛
と待賢門ゆく戦ひ大ふ武勇を振ひ永和三年二月七日採列
一名の合戦小平忠度を付く前後を得る此故ゆ熟功の美しき七

蓮生法師を
給仕門ゆ入る
ゆうそめ丹を西の
方へ見も向ぶ
東したふこを
風馬よ安く
り立ちうれ
易行道の
時人中の
ぶり

忠度の采地五邑と忠澄ふ賜へ忠澄武列秩父郡我野村より岩崎を
穿ちて石室に自像を彫り安置し其傍に不動堂を建て
忠澄菴と號し又武列榛沢郡岡部ふ住して岡部を名乗り
墳墓に築き忠澄靈神と称し其外良従の古墳数く
有り宗祇法師行脚の頃此墳よりひて懐素の和歌に詠ん

なれをかの高砂山の古墳小塚の古原に松風を吹　宗祇法師

熊谷より武里二十町八釈六七町許民家相接しく
巷に入る所を深谷と称す

深谷 武蔵

観音堂　深谷より一本の柳の下にあり其額ふ曰
桑園坊の碑あり
我佛法ふへく風雅に入る
ものとなれく佛法をさへ
なれ事に新しく成ぬるやこのえん　桑園坊
これに見へく
ちとせをくや柳老骨と非乗ふ　初五　祖風

本書四十九

八釈に行ゆけば大木の杉むらく道の幅も廣くして世の人
江府ふ近きを去る東方むらく新郎村を過ぎて巣鴨あり高
柳を過ぎ後板橋岡新田村あり植木むらく成る市原むら
より熊谷の駅よりつる

熊谷 武蔵

鳥巣中ふて四里八町八釈三百町民家相對して巷をなす
左右ふも所あり至つく狭しく所々古社より秩父山へ三里ま
八葉に島山重忠の旧趾に城のあり江戸より島山へ
十六里熊谷より幸手へ二里半南の方なる利根川へ二里半ふ
あり此所ふ義経別当実盛を祭り所に巷を里半なり八宿
に赤城明神の廟一所あり
蓮生山熊谷寺　熊谷の宿中にあり浄土宗
幸尊阿弥陀如来　恵心僧都の作多田満仲の息頼光丸
法師持　持ふ佛く坂東門弥陀佛の其一なり蓮生

熊谷寺

熊谷直實古跡

蓮生法師木像（檀木）

同墓（法然の弟子の分数の中にあり）

（嘉元年丁卯九月四日と撰）

抑熊谷次郎直實は桓武天皇の後胤平盛方の子なり若冠の
比関東に赴き久下直光の聟となり成長に及ひ武勇ならび
なく都待賢門の合戦に抽んでて右大将頼朝公の
恩賞に与り武蔵の国の内に所領を給はる
其後妻永二年甲辰二月七日搦列一谷の合戦に平家の
討ち漏したる五郎直家と戦場にて出会ひ一騎の勝負を
遂ひ敵を組伏せ首を取らんとせしに其者の子なりと
其身弓馬の家に生れ後生の思ひ出にもと思ひ直家の
子の為建久二年の頃久下権守直光と縁組をなし武蔵国久下
熊谷の境に草庵を結ひ朝夕弾ひ豆列走湯山に入り出家
登り法然上人の御弟子となり二尊院念仏の行者となり成仏す其後

[illegible]く元久二年故郷へ帰るべきよし上人の願ひ[illegible]れしかば自画迎接の
曼陀羅并に御自作の御新絵賜りて蓮生これを授かり武列へ下りける
時不肖西方の行者として仮初にも西方浄土せざりければ馬にも遂てよ
かくは絵書せるさんぬ蓮生法師のおれ

浄土にも別の着るべき法衣あるべしとて後ぞせひけ

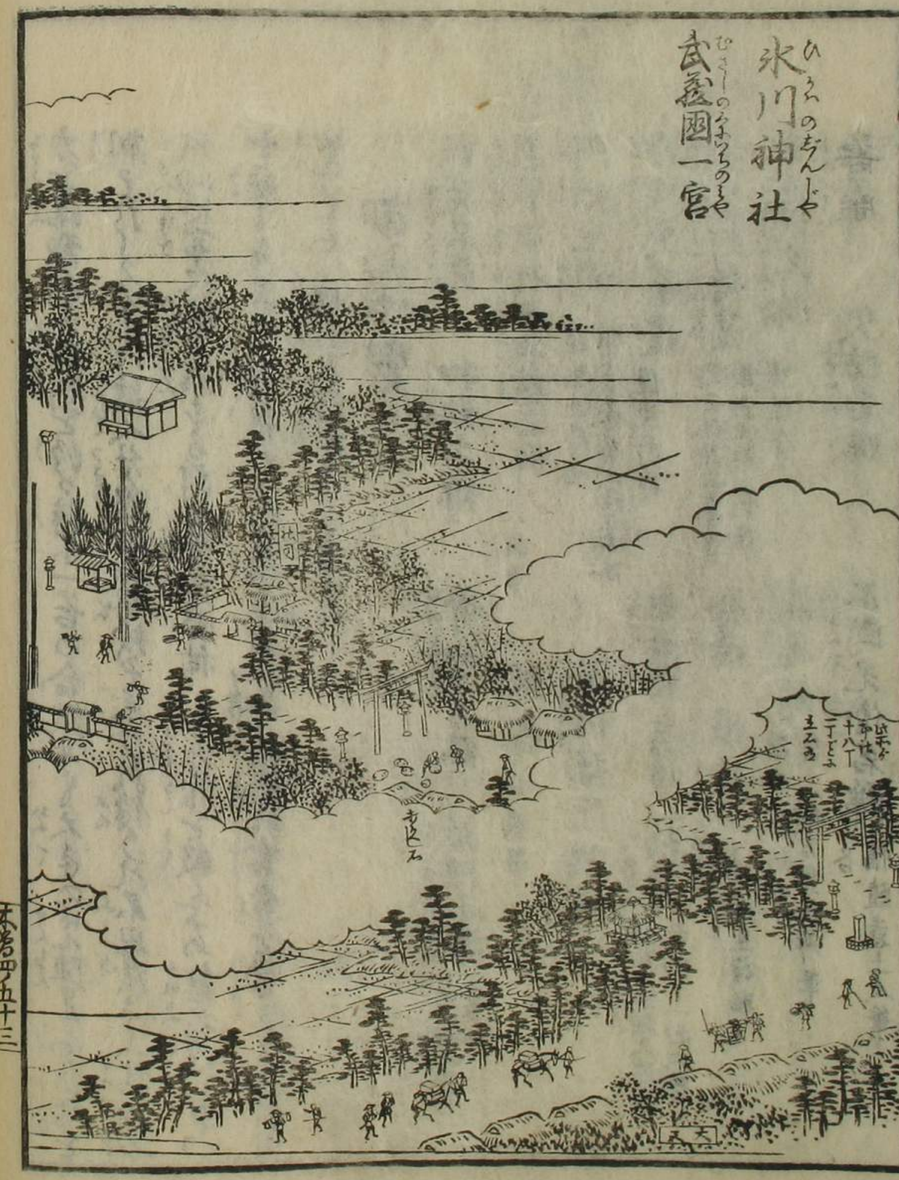
建永二年九月四日午刻往生すべき仏勅なりしを材星の辻ふれを
立てをるを不思議して其日より改めて常に高声念仏して眠と
ばかりなく往生し畢ぬ遠近の老若雲霞のごとく集りて西方さして去る
麻のごとし紫雲の幕庵の上より立籠て一時ばかりなりて西方さして去る
これ上品往生の霊瑞なり後世天正年中幡随意上人中興開起有
今の慈給寺これなり

稲荷神伝弘法大師託宣直言不断伝尊あり
て猛敵抗討魔け陣頭に対し熊谷弥三郎と名乗を遂実に

力を添戦ひ小勝利を得る特に一谷の合戦も大手の先陣に向ひ給を
制するにより彼人分遮ひ加勢なく走け帰りれ不思議さに其姓名
抗問に答に汝が信ずる所の稲荷神と名乗を教へよ熊谷弥三郎
也現ずるこそ忍其あらんと思ひ居しに即岳嶽に宮舎を営くこ神と
崇奉今尚山麓に在寺しなり

尚山什寶

放光名號　和歌名號　斧磨名號　弥陀三尊　名国光大師
直實所持母衣旗名號　日真筆　理書　日真筆
阿弥陀佛　蓮生法師他　唱上寺學誉大徳正宗附　裸形弥陀　傳来
迎接曼荼羅　蓮生所持　熊谷弥三郎門稲荷　神伝弘法大師地
蓮生所持数　内ヨ弥陀三尊書　国光大師　真筆　寺地十一面六臂
十五遍名號　蓮生筆　念珠　鐵鉢　証以上　蓮生持物
寿牌　火防名號　逆馬画　狩野清信筆　賛大納言實維卿筆
不断光佛名號　各　幡随意上人筆


氷川神社
武蔵國一宮

御袈裟　珠數　幡隨意上人所持　子孫に置狀　蓮生自筆

平經盛卿返狀　訓閲集拔書　蓮生所持　運氣考英旗竿答す法

幕　石橋山の勲功ホンヿク　騎鞍　蓮生所持

將軍頼朝公より拜領

熊谷直實居城　戸田八郎村より東竹寺より孫寺あり

東鑑云　治承六年六月五日甲辰。熊谷二郎直實者。匪

勵朝夕恪勤之忠。去治承四年。追討佐竹冠者

之時。殊施勲功。依令感其武勇。給武藏國舊領

等。停止直光之押領。可領掌之由被仰下。而直

實此間在國。今日令參上。賜件下文云云

又云　武藏國大里郡。熊谷次郎平直實。所定補

下所領事

右件所。且先祖相傳也。而久下權守直光。押領

事停止以直實爲地頭之職。成畢。其故何者。佐

汰毛四郎常陸國奥郡。花園山楯篭。自鎌倉令

責。御時。其日。御合戰。直實勝萬人。前懸一陣。懸

壞。一人當千。顯高名。其勸賞件熊谷郷之地。頭

職成畢。子々孫々永代不可有他妨。故下百姓

等。宜承知。敢不違失

治承六年五月　日

久下　熊谷次郎直實が伯母聟

吹上　久下次郎直光が領所なり　東より西へ流れる川足利の吹上の茶屋にて思さ一足袋を

王の面影あり　みかほなり　右なり　川足利の吹上の茶屋にて思さ一足袋を

たよ　悪の城の

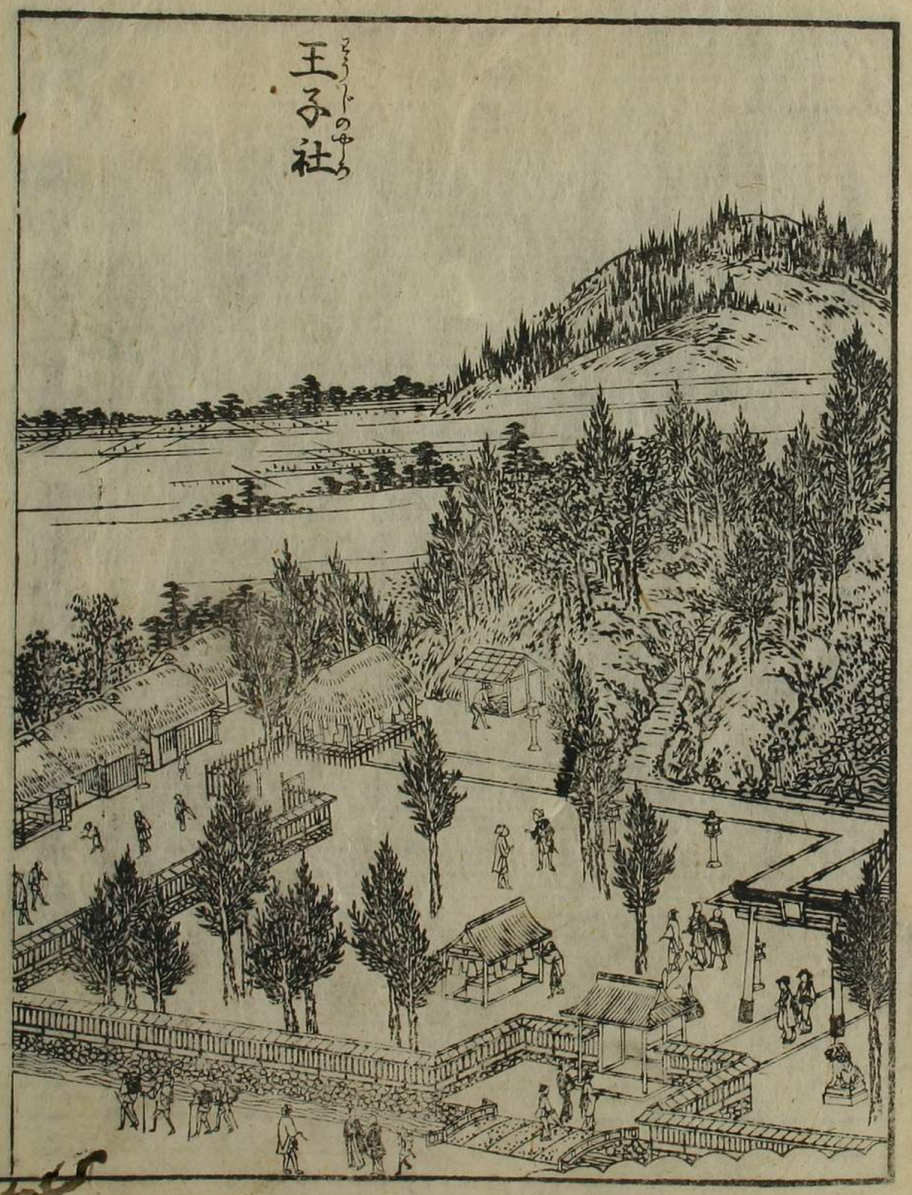
あり　一里塚あり

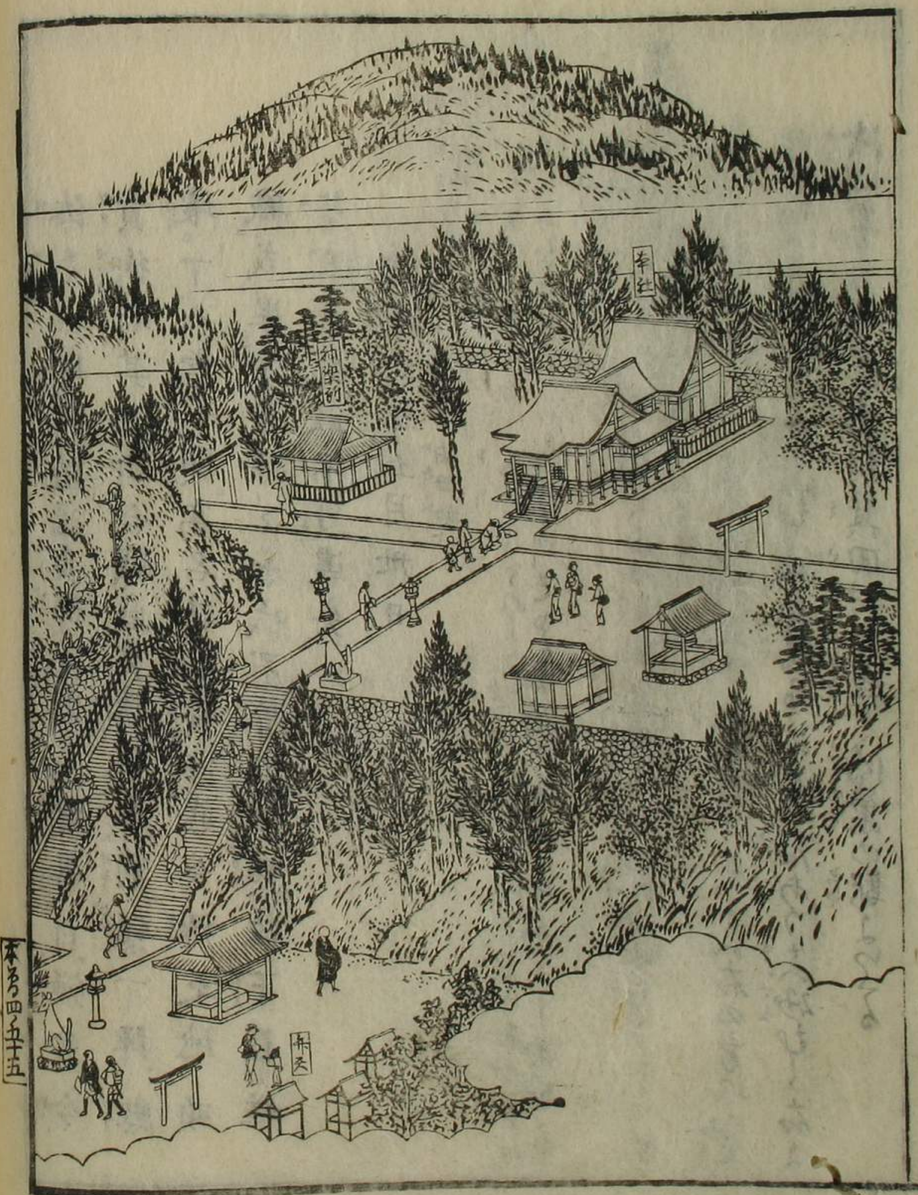
其田　須佐社　宮ホ　念佛院ホ社あり

熊谷の狀況　戸田八郎村久下むかひ原より右の方に山王

の祠あり　こゑ上　こゑ場あり　茶屋あり　まゆむかひ右より

濱同輩　鬼ある中井村　其田村をとく　語菓の駅よりくる


王子社


本ろ四ろ五十五

武蔵 鳴巣

桶川まで一里三十町 高麗三日市 民家相對して巷をなす其所散在して住居する家多葛塚の神の廟一流あり

又大木の杉林大竹の林あり左の方に鉢林帝より日光山への道有又

こゝに勝願寺とゝり浄土宗十八檀林の一ケ寺なり東むき三軒茶屋

坂を登り上田村より栗作堂あり又濱間宮えゆく道巣鶴村より天

神の祠右より長門寺あり左もゞ新田村を過て桶川の駅よりこゝ

武蔵 桶川

上尾まで三十町 高麗三日市三町ばかり民居相對して巷をなす宿り

浄念寺とゝり寺あり又岩付への道こゝより

計駅坂を登り所原村南むき左へ窪村右へ雷電山こゝ林あり

この間より雷電の廟一流あり門前村中むき坂を烟村より鍛冶堂有

武蔵 上尾

あゝ上尾の駅よりこゝ

大宮まで二里八町 此駅こゝ川越道岩付道日光道あり左の

方に濱間祠これ坂を登り猪背所珍むき梶村を過て賀茂村に

賀茂祠あり 高壁村 草村土合所坂を登り大宮の駅よりこゝ

武蔵 大宮

浦和まで一里十町 宿の入口

東光寺とゝり禪刹あり

氷川神社 大宮の駅より西延喜式云足立郡氷川の神社名神大月次

新嘗 武蔵國一宮と称す

祭神 素盞嗚尊 此所の生土神

女躰社 中社の左へあり 猪田姫を祭る

五山祇社 大山祇 中山祇 葛山祇 正勝山祇

金鑽社 手摩乳 足摩乳の今坂 高麗中社の傍へあり

氷川王子社 神他の傍へあり

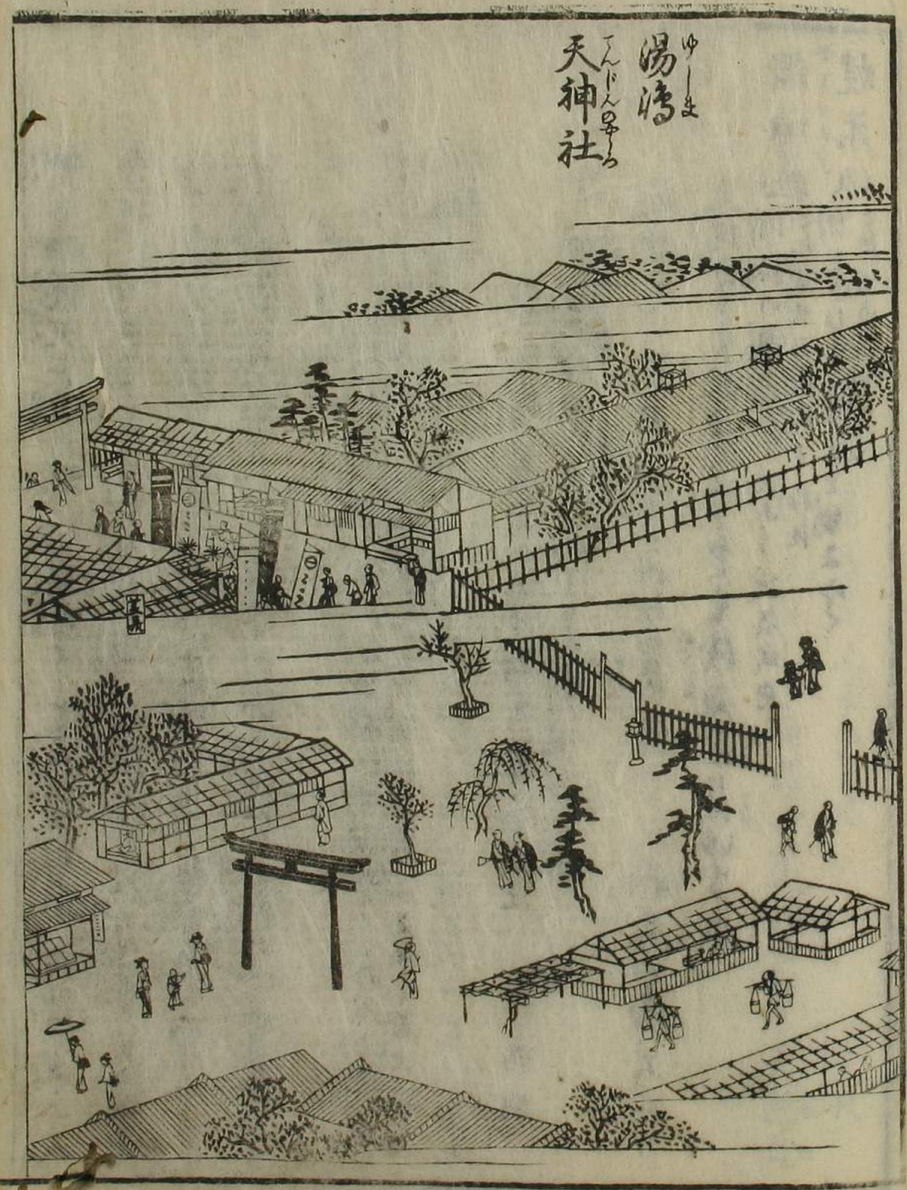
末社 住吉社 布留社 神明宮 愛宕社

神樂殿 池の東にあり 牟地堂 池のゆへあり

不動堂 日所へあり

支當社 高麗の一之宮なり社頭廣く神苑の池あり反橋有

湯島天神社



中ホ雜賊天を安に神佐森然として並樹の松原一名吾まで十八
町其中に神主岩井角井留居住し社領三百石例年六月十
五日ホ川を南國の大社なりて清人陰晴を燥ぶ者ホ絶る事ホし
氷川社を江府ホ比ホ者なるもみな南社を勧請の御神なりそ
ホ稜原
大宮原　野原の間三十町許中程より北陽の果に流れ入る幅三十歩許の所より迫田の高山見ゆる富士濱間
甲斐武蔵　上列伊豆保
なりあざやかホ見へ
夏も雪富士ホ濱間ホ臭乃さ
針ヶ村　右ハ高合村あり此所ハ富士峯ハ見ゆ　馬明
蕨まで一里半ひぐらし社ホ月讀宮又稲荷の角ホあり
浦和（武蔵）　空晴るハ紀ホ見ハ濱間ホ見ゆる
調神社　浦和の南岸にあり延喜式内し
焼米坂　自ハ北三歩程と移に鎌ヶ谷ホ焼米を鎌ヶ谷ホ
此坂ホ

中ハ米や麻き人ホ多ク　半残
浦和ハ北ホ岩ヶ谷と白ホ村程を村過ヶ谷ホ延長
樹現の中ホ多ホ
板橋まで二里八町ハ山驛民居六七所あり
蕨（武蔵）　戸田川ハ二十四町あり
名を図ヘ
ハ驛を過ぎ元ヘ
子安の釋迦ハ多ホ
戸田村　高親　秀曉
戸田川　下流を南田川ホ流る
此河を色ホ志村よりホ
又地蔵坂を
蕨吉　稲荷の角ホ
驛ホ
里女ホ
戸田村ホ
川端方道あり
間川ホ
川沢村清水村ホ
蓮沼ホ
又小坂ホ
堀切坂より板橋の

本書四五十九

武蔵 板橋

江戸日本橋より二里ばかり中仙道の東板橋にて所十所許あり
所々に花魁店茶屋を形ばかり紅粉を粧ひ花簪をかざる格子のうちゆたかに嬋容を歩とぶ花くあんをこそ
姑と眞もとるも多し

類聚 因ひらひらと見るやたれめ立むり上る流を玉章 頼政

平塚明神社 板橋の駅の方平塚山にあり 別当安楽院滅官寺と号す 八幡を即義家 賀茂を即義綱 勅羅三郎義光の三霊を
祭神 多りて三社とす
猿塚 本社の後にあり義家の猿を
収光らんと塚なり
山の滅官と云ふ板橋
あるとき滅官寺平の愁あり
祈りて滅官寺
王子社 王子村にあり 別当を
東光院金輪寺と号す
祭神 熊野三所神

寛永十一年 官家より佛造立林道春其記を書に例祭七月
十二日寺中十二坊踊を出す
稲荷社 日村にあり
金輪寺の支配なり
飛鳥山 弥生の頃白雲と見て雪と散る花よ袖も神さびたるかな
白ひふ高き花拾ひ家苞にもとめ
垂風花馥

風吹く動ぬ雲と見ゆるむ花の香こそ盛り 蘇禹

富士権現 駒込にあり 別当を
寺郷瑞泉院と号す
神明社 駒込中村にあり 寛永年中に池上
別当松光山大泉院 義常所造
文治五年 源頼朝公の家創
建安年中 泥氏の法度再興しあり
田畑八幡宮 駒込にあり 別当を白龍山東覚寺
と号す 駒込神明宮とは時々頼朝の勅願也
根津社 谷中にあり 神主伊吹氏
別当を昌泉院
赤神 素盞烏尊 大己貴命 蛭子命 三柱共に

神田社

社の北の方に本殿の板はれ文明年中田道灌の築造なり宝永二年の比宮家より親ふ
社殿造営あり延享年の棟札に寛永九月六日の棟札に寛永九月廿一日

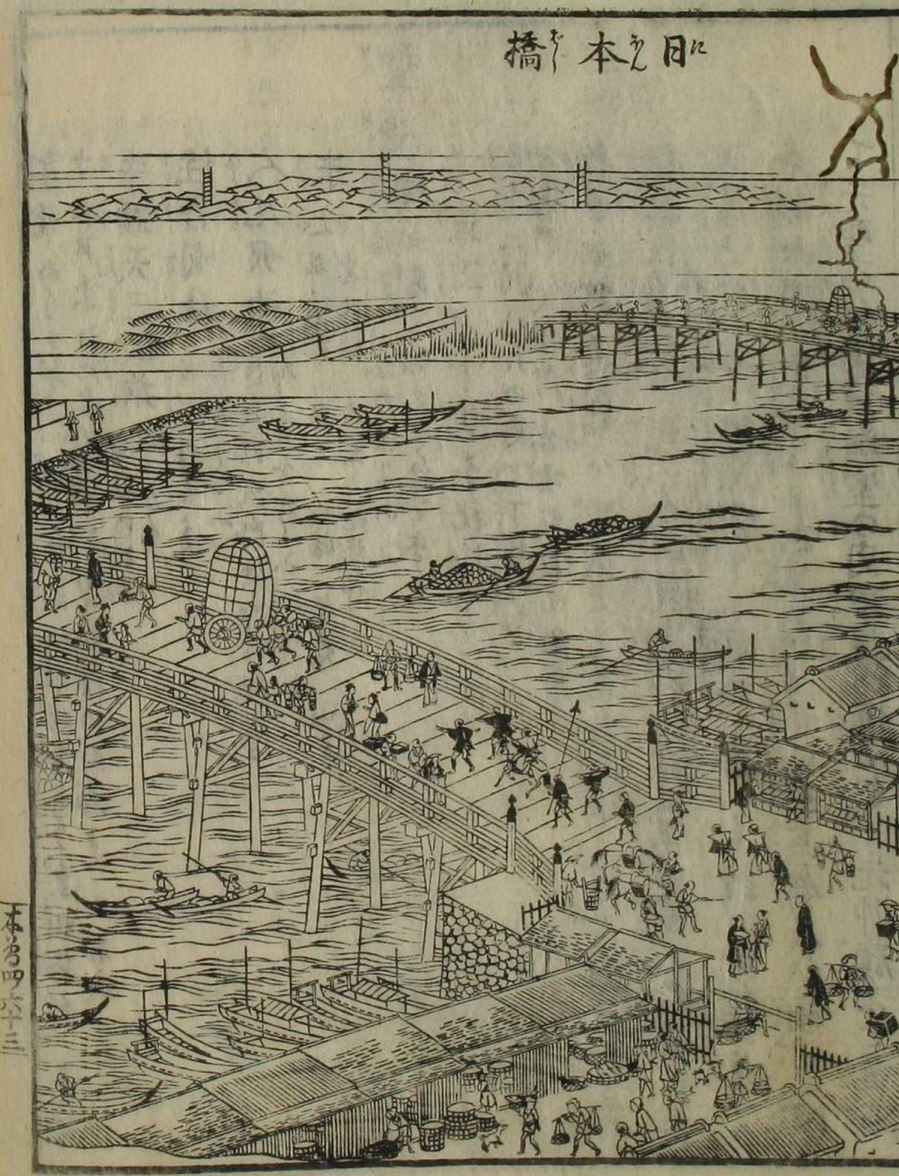
湯殿天満宮 別當北野山喜見院
祭神菅公 文明十年 太田道灌草創に
祭日二月十日 十月十日
戸隠明神 地主神 内藤氏
笹塚稲荷社 社頭より
妻恋稲荷社 湯殿天満宮 主村幸氏
祭神日本武尊 橘姫 倉稲魂神 三座祀る
日本武尊の祭礼は東海道を除て妻恋にて行れ
神田社 神主芝清氏
祭神大己貴命 古は神田と云神宮へ初穂を神供
村人大己貴命を五穀の神なる少くこれ紙なるくまくまと世
将門の霊を祀る田地開墾ある者丑年毎郡芝寄
今の神田橋畔の井家の屋敷の氷川宮の
無社なり今も祭礼の時は神輿出むかの所ふるりく

紀伊国名所図会 巻之四十二

十五日祭礼の日神幸あり四座の役者より出勤に
牛頭天王三前 南社の地主
住吉明神
人丸明神 神像を安置ふ
末社 神明社 訳方 大宝 稲荷 山王
恵比須 八幡 祇園神

聖堂 湯島昌平坂の上にあり 紀家の学校と称す

文宣王 十哲を祀る
釈奠二月八月の内上丁日行ふ
仰高門 入徳門 杏壇 礼器あり
抑本朝釋奠の始は 文武天皇大宝元年二月丁巳日をもつてめて
行ひ其後 光仁天皇宝亀三年右大臣吉備公釈奠の具
試奏し礼典器物等表を小回色に彩る幸続日本紀に見る
本朝釈奠の式は享日未明五刻に郊社令其屬及び廟司と宰
[illegible]先聖の神座は廟室の内中楹の間に設く先師顔子と肩座



本町四丁目

閑子驀より以下再有りてを帰く四座そ〜文宣王の東向
設て西を上座とし文季路より已下子夏までの五座は文宣王の
西に設く東は上座とん侍く十一座何れも南に向て二列其外魚
類等は六衛府より〜れを進む陳設の品々執事の負担何れも延
喜式に詳あり

板橋を立て左に川越道あり右に雑司谷護国寺四谷あの道
あり直に行て平尾村を過て巣鴨町に至る場の第一なり
六地蔵堂あり〜後より駒込の町よりすけのせん窪に過て竹町の左
の方に自山椿現の原〜後を経〜退て右に岩槻日光道右
に幸郷筋〜より日幸橋に入一里より近〜森川宿に通て幸郷
六所あり〜所因に神田の原〜後あり神田廣瀬左の方に湯殿
天神の中に社あり〜右の方に聖堂筋遠橋の序見附をへて
十町余を過て日幸橋に入て

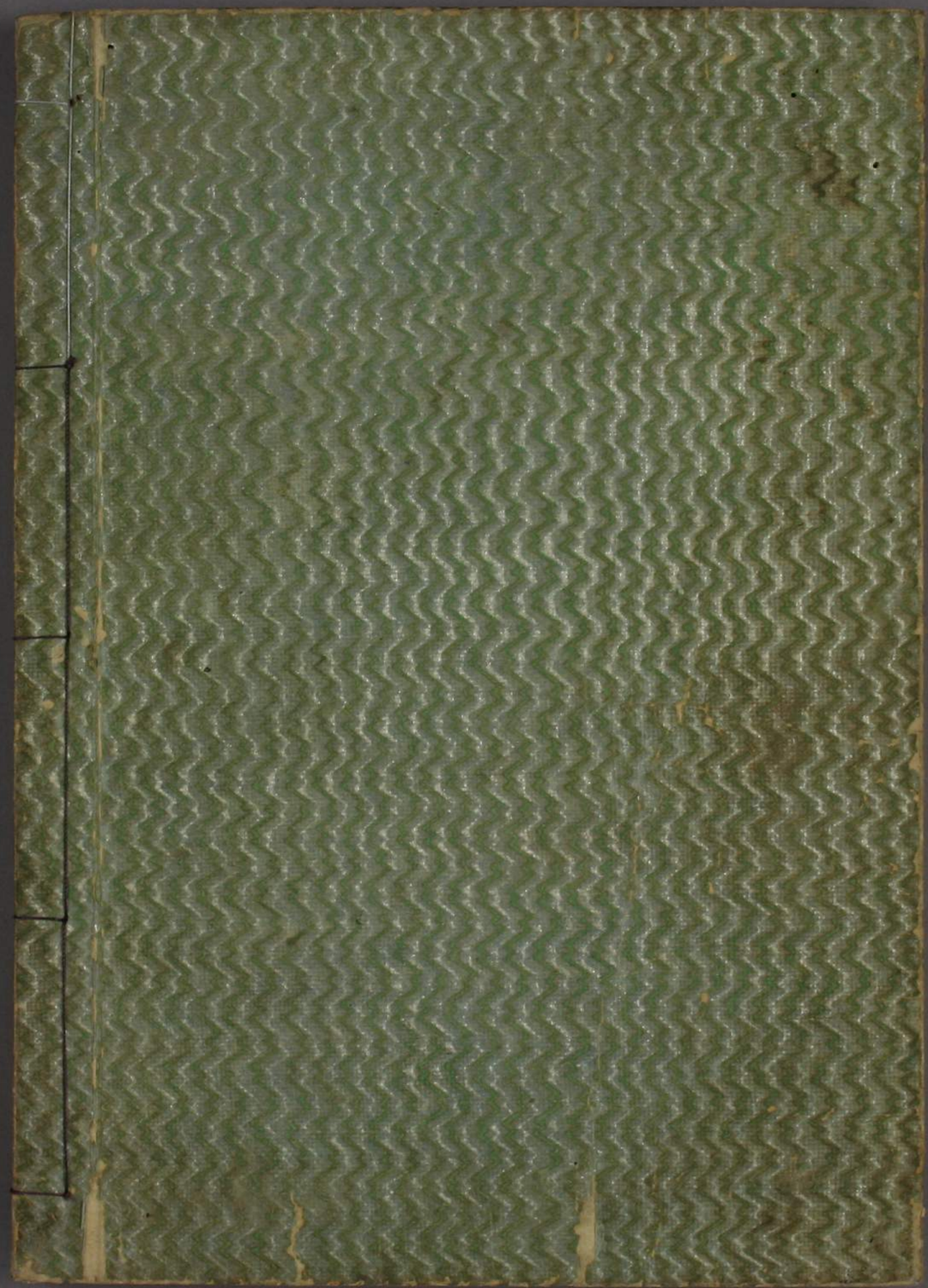
本書卷六十四

日本橋 江戸

此橋の袂宿小〜に一両日滞て〜て続く船に乗のべて
〜の釈迦堂に過て本尊を拝して神楽乃
原に後香取の神社息栖の神を後〜廻て船に乗て下る
に三日逗留して神社名所旧跡先〜又船に乗て延方に先く
板久牛堀を過て麻生に着て逆を過て小川宿中
片冊に過て小畑に十二塚と登て筑波山に着〜まで〜
の釈迦を拝て日光山に着〜まで〜
後の巻に記す

新古 武蔵野は行くも秋の果てはなれのうの風の末ぞあはれん　通光

同 行末をそなたの武蔵野小萩に秋の風ぞ吹くなる　拾遺愚草

新後拾 ゆく末は秋の武蔵野小萩に秋の風ぞ吹くなる　藤原長秀

本書卷名所圖會卷之四終